リリカルなのは～中２病な（元）中２の異世界転生記～

爺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのは～中２病な（元）中２の異世界転生記～

【Ｎコード】
Ｎ６５４５Ｖ

【作者名】
爺

【あらすじ】
中２で中２病全開の馬鹿正直な男が転生してひたすら暴れる物語！
チートな力を引っ提げて知らない原作をバラバラに砕く？
ほとんどコメディー？たまにシリアス？
ダメな作者の描くダメダメ物語
気に食わないなら読むんじゃねぇ！

第1話　転生？なにそれ？おいしいの？（前書き）

前書きぃ？そんなもんねえよ

第1話　転生？なにそれ？おいしいの？

いきなりですが、今、俺
真っ白な世界に立ってます

ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ

・・・落ち着こう

何があった?俺の身に?

「たしか・・・飯食って、糞して、歯磨いて、風呂入って、ＧＯＴＯ　ＢＥＤ！　だよな?」

あ、そうか、夢だね!夢なんだね!
よく2次創作とかにある死んだから転ー生!とかいう人が行く空間じゃあないよね!

「よくわかったのぉ、これから貴様におこることが」

あるぇ～?目の前にいわゆる神様っぽいおじさんがいるよ?

「誰が神様っぽいおじさんじゃ!わしは神そのものじゃ!」

さすが夢!心を読まれた上に神だって!

「現実を見よ、おぬしはわしが間違えて殺したんじゃ」

Ｗｈａｔ?

「はぁ、現実逃避もほどほどにせい」

「うそん」

「ほんと」

「つーかなんで寝ただけで死ぬんだよ!ふざけてんのか!あぁん?」

「こわっ!こいつ怖い!神の襟つかんで脅迫してきた!」

「なんですか?俺の寿命を表す時計でも落としたか?」

「・・・なんでわかる?」

「真実なのかよ!」

俺は寝巻の帽子を地面に思いっきりたたきつけた

「なんで俺の冗談がこんなに連続で当たるの!?」

「落ち着いてくれんか?」

「落ち着けるかぁ!」

~しばらくお待ちください~

「落ち着いたか」

「まあ、一応」

はぁ~俺まだ中2だよ、未来を背負って立つ子どもたちだよ。なんで死ぬのさ?

・・・神の手違いで

「本当にすまなかった、なんで貴様を転生させてやろうと思う」

「でたよ、転生させて自分の罪を帳消しにしようとするの」

「ぬぅ・・・」

「まあ、良いけど、もちろん能力はつけてくれんだよな？」

「もちろんじゃ、制限はあるがの」

「じゃあ、まず魔術士オーフェンはぐれ旅よりディープドラゴンの暗黒魔術」

「・・・かなりマイナーな能力じゃの」

うるさい、強いんだよ、ディープドラゴン

「２つ目、ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　より［破砕（クラッシュ）］」

「ずいぶんとチートな・・・」

「最後に・・・」

「どうせＦａｔｅとかガッシュの能力じゃろ」

「いや、こいつを作ってほしい」

俺はポケットから１枚の紙切れを出した

＞ｉ２８９９３―３７３２＜

「重機剣ガイア・グランザーヴ？何なんじゃ？この中２病全開の武器は？」

「俺の考えた武器、別にいいだろ、俺中２だし」

※これを考えた時作者もほんとに中2でした

「まあ・・・いいじゃろ、作ってやろう」

「ほんとか！サンキューな！できれば重さは前世の今ぐらいの俺が片手で自由に振り回せるぐらいでたのむわ」

「身体能力とかはいいのか？」

「う～んできれば、前世の俺、そのままで」

「そうか、見た目はどうする？」

「超モブキャラで、ただし、あくまで普通な、きもいのは無しだ」

「物好きな奴じゃな」

「目立ちたくないんだよ」

これは本音だ、前の俺は俗に言うイケメンってやつで女子がうるさかったんだよ

作：ちっ、リア充が・・・

「転生先は？どうするんじゃ？」

「ん～神様のお勧めは？」

「リリカルなのは、かのう？」（ハーレムに苦しむ転生者の姿が愉

快すぎるわい）

ん？何か一瞬神が笑った気が・・・

「んだそれ？まあいいや、じゃあそこで」

そう言うと、神が何かを思い出したように

「そうじゃ、重機剣ガイア・グランザーヴは小型化しておくぞ」

「ありがてぇ、そのままじゃ持ち運びにくいしな」

「大きくするときは〔ｓｅｔｕｐガイア・グランザーヴ！〕と言うんじゃ」

「ＯＫ」

「ついでにガイア・グランザーヴ起動時に甲冑をつけてやろう、なにがいい？」

自棄に気前がいいな、じゃあお言葉に甘えますか

「戦国ＢＡＳＡＲＡの伊達正宗Ｖｅｒ２で」

「ＯＫじゃ！ガイア・グランザーヴには人工知能を組み込んどいたからの。ほれ、この剣の形をしたキーホルダーが待機形態じゃ」

俺はガイアを受け取った、だがここまでくると

「・・・なんかあやしいな」

「何がじゃ？」

「お前の態度だよ、なんでそんなにきまえがいい？」

「・・・まだ教えられん・・・」

「そうかよ、じゃあ、いつ教えてくれる？」

「おぬしが転生し、時が着たらじゃ」

「なら、待つとするか、転生して、な。」

大方俺以外のイレギュラーがその世界に入り込んだんだろ
だったら仕方ないよな

「うむ、頼んだぞ・・・」（いえん、ハーレムの修羅場を乗り越えるため。なんて絶対に言えん・・・）

「じゃあ、またな。話してくれるのをまってるぜ」

「では、行くぞ！」

神はどこのあったのか分からないひもを引っ張った

「やっぱり？」

俺の真下に大きな穴が開いた

「がんばるんじゃぞー」

「ふざけんなぁぁぁぁ・・・」

俺は真下にできた穴へと落ちて行った

第1話　転生？なにそれ？おいしいの？（後書き）

はっはっはーこの作品での俺は超偉そうにすることにしたぜ！

「うわー最低な作者だ・・・」

リア充が！黙るがよい！

「・・・すんませんうちの作者が無礼を・・・」

ファーハッハッハッ

「仕方ない。・・・暗黒魔術・・・」

ゑ？

「すこし反省てろ」

俺が俺でなくなるぅぅぅ！

ばたっ

「全く・・・」

第2話　俺は馬鹿正直な馬鹿だこのやろー（前書き）

連続投稿。
ただそれだけだ・・・

「いや、全然かっこよくないから」

第2話　俺は馬鹿正直な馬鹿だこのやろー

またもや突然ですが！

「うおあぁぁぁぁぁ！」

俺！絶賛落下中！
ってした山か？へぇ～近くに町もある～
って現実逃避してる場合じゃない！

「どうするどうするどうする（ｒｙ」

【マスター俺を起動しろ】

どこからともなく声が聞こえた！？

「だれ！？」

【俺だ、ガイア・グランザーヴだ】

しゃべった！？・・・あ、人工知能搭載されたんだっけ

「それで助かるのか！？」

【ああ、早くしろ】

うおお！もうすぐ地面だ！

「ｓｅｔｕｐガイア・グランザーヴ！」

俺がそう叫ぶとポケットに入っていたガイアから光があふれた

「おお！」

光がやむと俺は右手にガイアを持ったバサラの伊達正宗になった

【マスター雷の弾を装填して・・・】

「そっからはわかる！」

その設定考えたの俺だし！

ガチャン！

俺はガイアを折り曲げ、弾の装填口に雷の弾を入れた

そして・・・

「リロード！」

ガキン！

俺はガイアを元に戻した

ガイアの刀身に雷の力が宿る・・・

「サンダーインパクトォォ！」

その力を衝撃として地面に放った

ドォォン

地面が広く抉れ、落下の衝撃をすべて相殺した

「た、助かった・・・」

【マスター疲れている所悪いが人が来るぞ】

「まじ?めんどくさい・・・かくれるk「そこの君。」わーお、速いな~来るの」

俺がガイアを待機モードにして隠れようとしたとき2本の小太刀を持った男性に見つかった

「ここに何かおちてこなかったか?」

俺は隠すのは苦手だ、どうせそのうちぼろが出る。
なら

「それ、俺です」

「何を言っているんだ?」

「いや、だからおちてきたのは俺なんですよ」

「え?」

うん、普通の反応!

「さらに言うと俺、転生者っていうのかな?とりえず別世界から転生したんで」

「・・・頭は大丈夫かい？」

心配された、うん普通だ。

「信じてもらえないかもしれないですが、これが真実です。」

まあ、しんじるわけｎ「君がそこまで言うなら信じよう」わーお。
信じてくれたよ、この人。

「本当ですか？そんなこと言って実は精神科医に連れていくつもりなんじゃ・・・」

「さっきのことを話している君の眼に冗談を言っている様子はなかった、確かに信じがたい話だが、証拠なんてそれだけで十分だ」

なんて器の広い人なんだ、俺ちょっと感動したね、うん。

「信じてくれてありがとうございます。ちなみに、ここはどこですか？」

「地球の海鳴市だよ」

おお、異世界から来たけど同じ地球に来るとは、まあ、海鳴市なんてないからパラレルワールドなんだろうけど

「そうですか、では」

さあて、今日はどこで寝ようかな～♪

「ちょっと待つんだ。」

「はい？」

「行くあてはあるのかい？転生者なんだろ」

「ありませんよ、だから、野宿です♪」

一回やってみたかったんだ～野宿

「なら、家に来なさい」

Ｗｈａｔ！？

「え？」

「泊まるあてのない子供を放っておくわけにもいかないからな」

この人は・・・

「器でかすぎでしょ・・・」

ん？子供？

「えっと・・・今の俺って？」

「子供の姿をしているよ」

ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ

「まじか・・・」

「前世が何歳だったか知らないが今の君は子供だ、放ってはおけない」

仕方ない・・・

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。えっと・・・」

「高町士郎だ、士郎でいい」

「じゃあ、士郎さん。≪今日は≫お邪魔させてもらいます」

「ああ、≪しばらく≫家で面倒を見てあげるよ。えっと・・・」

あら？さりげない強調は効果無しかな？

っと、名前決めて無いや。じゃあ・・・

「大地で。」

「苗字は？」

「とくにありません、親も家族もこの世界にはいないんで」

「じゃあ、うちの子になるかい？」

「いやいや、戸籍面とかで問題が・・・」

神：おもしろそうじゃな、その話。戸籍に≪高町　大地≫を養子として加えておくかの

「・・・大地君、今の声って」

「はい、神です。なんか、問題あっさり解決しましたね・・・」

ご都合主義ってやつか！？

「まあ、問題も解決したし。これで君はうちの子だ」

「本当にいいんですか？」

「ああ、構わないさ」

この人は・・・

「器広すぎだろ」

うん、２度目だこのセリフ

と、いうわけでやってきました高町家！

「道場まであんのか・・・」

一言で言うとでけぇ！

「じゃあ、入るときはただいま。だからな」

「了解」

士郎さん・・・いや、父さんが玄関の扉を開けた

「「ただいま！」」

俺は、新しい家族を手に入れた

「道場か・・・剣道の相手してくれるかなぁ？」

転生、意外と疲れるけど、面白いなおい。

第2話　俺は馬鹿正直な馬鹿だこのやろー（後書き）

「士郎さん、優しすぎだろ・・・目から涙が・・・」

スミマセンスミマセンスミマセン（ｒｙ

「こっちは絶賛ぶっ壊れ中か・・・」

トオル「おーこれが作者（バカ）の新しい作品か」

「徹さん！」

トオル「よう。大地だったか？」

「はい、先輩にあえて光栄です！」

トオル「先輩って・・・まあ、そんなことより俺もたまにこっちに来るからな」

「お願いします」

トオル「んじゃあ、このへんで」

「「また今度！」」

主人公設定

作：これが今作の主人公ＤＡ☆

・高町大地　（イメージＣＶ：竹内順子）

・年齢：１４→８

・性格：嘘をつくのが大の苦手、馬鹿で単細胞だが人のことが大好き。とくに、仲間のためにならどんな無茶でもする。いわゆる熱血主人公タイプ。ただし、前世は母親の影響で少しオタクなところがある　また、祖父と父が剣術道場をやっていた、持ち前の運動神経でどんなことでも真似てみようとする。
そのため普通に剣道もできるが、戦いの型がバサラの片倉小十郎ベースになっている。
ちなみに中１の時に剣道全国大会で優勝している。
ただ、頭は悪いのに理屈っぽく相手を説き伏せるのが大得意。それで友達に少し引かれていた。

・口癖

・絶賛～中！

・特技

・剣道

・裁縫

・運動

・マシンガントーク（うざい相手を説き伏せる質問攻め）

・機械弄り（その気になればハッキングも可）

・技

・暗黒魔術：視線を媒体に生物・非生物を問わず、ありとあらゆる物に暗示をかけることで支配する。視線の範囲内ならば、並みの物体を一瞬で損壊させる、空間に「距離は０である」と暗示をかけての擬似空間転移、生物の精神に暗示をかけ五感を共有した使い魔にする事や、魂を消滅させ廃人にする等極めて強力な能力を持つ。・・・らしい

・破砕（クラッシュ）：触ったものを破壊、分解する技、神のはからいで自分の周りにフィールドを張り、その範囲のものを破壊、分解することも可能となった。（ただし、範囲は狭いので防御にしか使えない）

・武器

・重機剣ガイア・グランザーヴ：中２病全開の自作武器、神にデバイスへと改造された。

刀身と柄の間を折り曲げることが可能、そこにある装填口に≪弾≫を入れるとその属性に対応した攻撃が可能になる。色のイメージはデジモンのアグニモン。
起動するとバサラの正宗のような服装になり、追加で腰の左側に弾のホルダー、右にライフラインがある。
弾のリロードは基本的に1度に3発が最高、4発以上のリロードはオーバーリロードといい、通常のリロード以上の力を発揮できる、ただし、体が壊れる恐れが出てくる。リロードの本数が多いほど体にかかる負担も大きくなる。
同じ属性の弾を同時に3発以上リロードすると刀身の色が変わる。
また、通常のデバイスのカートリッジシステムとは全くの別物。

・弾：重機剣ガイア・グランザーヴも付属品のようなもの。属性は火、水、氷、雷、闇、光がある。
これ自体は使い捨てのアイテム。
装填せずともそのまま投げても使用可。その場合、火は着弾点から爆発、水は水が噴出、氷は周りが凍りつく、雷は半径1メートルの敵を麻痺、闇は相手の影を固定し行動を制限、光は閃光弾効果となる。大地の生命力を変換したもので、ガイアを起動するとホルダーに自動的に作られる。

・ライフライン：シークレット

作：こんな感じですかね？

「チートだな」

作：本人が言うか？本人が？

「・・・暗黒魔術は制限しとこ・・・・」

作：俺に使ったくせに・・・

「・・・ごめん」

作：ちなみにＣＶに異論があったり、こっちのほうが良くね？とか言うのがあったら教えてください。

「後、紛らわしいけど弾のもとになる生命力は地球の≪大地≫からもらっているもんだ」

作：大地自身の生命力でもよかったんだけど、それだと大地がすぐ死ぬから（笑）

「笑い事じゃねぇ・・・確かにガイアをベースに戦うからな、俺。」

作：じゃあ、今回は後書の分もここで済ませちゃたんで、ここらへんで。

「「また今度！」」

第3話　新しい家族と誘拐!?（前書き）

ちょっと時間かかりました

「別に問題ないんじゃね?」

ならいいけど・・・

第3話　新しい家族と誘拐!?

しろ・・・じゃなくて父さんの妻と思わしき人がでてきた、
つーか若っ！

「その子はだれなの？」

「山で見つけて・・・えっと・・・何て説明しようかな？」

俺は正直に話す。

「大地です。この世界に前世の記憶を持ったまま転生しました。森で士郎さんに拾われて、この家の養子になりました。」

「え？」

「戸籍は俺を転生させた神が勝手に書き変えたので、今俺は2人の養子の高町大地ってなってます」

「はっきり言うね・・・」

「嘘は苦手ですから」

「本当に？」

おうおう、信じてないな・・・
まあ、普通の反応だ

「はい、真実です。迷惑なら出て行きますよ。俺は1人で大丈夫で

すから。」

嘘はない、飯なら2日位抜いても余裕だし。
寝床はどうにかなるさ。

「・・・」

考えてるな・・・
普通なら受け入れてくれる筈がない

「やっぱり、迷惑ですよね。失礼しました。」

俺は一礼して外に出た

「ちょっと、大地君！」

「士郎サン、やっぱり迷惑ですよ。俺の事は忘れて下さい。転生者と何て関わっても日常が壊れるだけです」

「そんなこ「そんなことないわ」桃子・・・」

あら？

「大丈夫、家には3人の子供がいる、1人増えても変わらないわ」

その見た目で子供3人!?何した!?

「それに、転生者でも子供よ」

桃子さんは俺の肩に手を置いた

「放っておくわけにはいかないわよ。それに、もう高町大地なんでしょ。自分の息子を見捨てる親はいないわよ」

この人は・・・

「・・・器広過ぎでしょ」

「何か言った？」

「いえ、なにも。じゃあ、母さん、今日からお願いしますね。」

桃子母さんは胸を叩いて

「もちろん！」

といった

優しいなぁ・・・この家族

ぐぅ～

「あ、」

俺の腹が鳴った

「お腹空いてるの？」

「転生してからは、何も・・・」

「じゃあ、美味しいご飯。作るわね。」

「有難うございます」

俺はその後、母さんの作った夕飯（時間的に夜食?）を食べた。
マジ旨かった。本当にそれだけ。
寝床は仕方無く道場に布団を敷いて寝ることに。

「転生初日から色々あったな・・・」

俺はポツリと呟いて眠りに就いた

翌朝、父さんよりも早く起きた父さん似の人に不審者とされ、道場から投げ出された
本当に投げ捨てられたよ。
仕方無く状況を説明したが聞く耳もたず
まったく、本当に父さん達の子供なのか?
と、いうわけで

「お前を倒して家から追い出してやる!」

今、兄貴っぽい人にやられそうです

「いやいや、俺は父さん達の養子だから・・・」

「貴様が父さんのことを父さんと呼ぶな!」

兄貴はいきなり木刀で殴りかかってきた

「わーお」

あら？いつの間にか俺は空中を舞っていた
兄貴にかちあげられたか・・・

「っと」

俺は片手で着地し、そのまま床を押して飛び上がり、後退しつつ立ち直した

「俺の一撃を受けて平然としている！？」

あれぐらいなら前世の親父のアッパーのが痛い。
あれは意識飛んだからね、本当に。

「急になにすんの？兄さん」

「貴様に兄さん呼ばわりされてる筋合いはない！」

「痛っ！」

こいつ・・・割と本気で殴りやがったな！

「目的はなんだ！？まさかなのはか？なのはをさらいにきたか！？」

「ちょっ、落ち着いて・・・」

「なのはは俺が守る！」

「話しを聞けー！」

なんだコイツ！？勝手に妄想して暴走した！？

正当防衛だよな・・・これなら攻撃しても正当防衛になるよな。

「無刀で無月極殺か・・・うまくいくか？」

俺は無月極殺の構えをとった

「うらぁ！」

まずは蹴り

「がっ・・・」

怯んだ所に肘打ちやヘッドバットをきめる。

「おらおらおらぁ！」

そのまま刀で・・・っと今は無刀だった

仕方無い、服を掴んで叩きつけてから投げるか、

「うぉらぁ！」

バン！

「どぉらぁぁ！」

バキッ！

「あ・・・」

ヤバっ、やり過ぎた！

最後、投げた力が強過ぎたかな?
天井に頭埋めてぶら下がってるよ・・・

「なんだ今の音は!?」

「父さん・・・」

父さんが道場に駆けつけた
・・・もう少し早く来て欲しかった

「恭也!?大地、何があったんだ?」

「あははは・・・」

俺は苦笑いしながら父さんにさっきの事を話した
その後、兄貴に俺の事を教えた

「恭也、伝えてなかったのは悪かったが、いきなり襲いかかったのはいけないな」

「すみません・・・」

「父さん、俺は気にしてないからいいですよ。あと、今日からよろしくな兄さん。」

「さっきは急に攻撃して悪かった。これからよろしくな大地。」

俺は兄貴と握手を交わした

「にしても、さっきの体術、どこで習ったんだ?」

「ゲームの動きを自分風にアレンジしたんだ。」

「へ、へぇ・・・」

「教えようか？」

「いや、遠慮しとく・・・」

「そう？」

結構簡単なんだけどなぁ・・・

「とりあえず、今日は朝の稽古はなしだな。」

「天井、後で直さなきゃな・・・父さん、この近くにホームセンターって有る？」

「ん？ああ、有るぞ、後で行くか。」

とりあえず、今日の予定は決まったな

「父さん、朝飯の前に自己紹介しときたいんだけど」

昨日の話からして、あと2人居るはずだからな

んで、朝食前

「昨日から養子としてこの家の一員になった大地、転生者だ。」

ポカーンといった音が聞こえてきそうだ・・・

「嘘をつくのは苦手なんで、はっきり言っておく」

2人の姉妹は呆然していた

「俺に関わる以上、守って貰うことがある」

「大地！そんな話聞いてないぞ！」

父さんは急に立ち上がったが、今は無視。

「まず、俺の力は人の命を簡単に奪える。だから、あまり他言しないでくれ。
次に、俺のとる行動に文句は受け付けない。まぁ、それでも多少は言うことは聞くけど。
最後に、何時でも俺を忘れられるように心を持て。転生者は何時世界の修正の力によって消されるかわからない。俺が消えたら俺を忘れろ。悲しまないですむように」

「・・・」

沈黙

「まぁ、それが条件だ。それが無理ならみんなの記憶から俺を消して、出て行くさ。」

「大地！なんで君は二言目には出て行くというんだい！そんなに私たちの事が嫌いなのか！」

「違います。好きだからこそ、です。」

「どういう意味だい？」

「俺は転生者、何時消えるかわからない。だから、消えた時にみんなに悲しんで欲しくないんですよ」

・・・沈黙

「さあ、ご飯が冷めちゃいます。食べ始めましょうか」

・・・沈黙

「暗い暗い！もっと明るく生きましょう！」

「・・・お前が原因なんだが・・・」

「あははは・・・」

苦笑いするしかないよな・・・

飯食った直後、俺に荷物が届いた。
差出人は不明

・・・つーか恐らく神

「結構でかいな。」

「大地君！早く開けてみるの！」

「なのは、これは俺宛ての荷物だぞ」

「いいから早く開けるの！」

なのはとは飯食ってる時に仲良くなった
ガイアにこっそり聞いたが、今俺の肉体年齢はなのはと同じ８歳ら
しい。

「ｏｐｅｎ！」

勢い良く箱を開けた
中には

ランドセル

どこかの制服

生徒証

教科書

手紙

が入っていた
・・・入学準備？

すると中身をみたなのはが

「この制服、なのはの通う学校の制服なの！大地君！転校して来るの？」

と言った

「少し落ち着け」

「痛っ！」

あまりに五月蝿いのでデコピンで黙らせた

「んで、手紙の内容は？」

大地君、二度目の人生エンジョイしとるか？
君のために小学校への転入手続きをしておいた。
明日から君はなのはのクラスメートじゃ！
学校生活、楽しむんじゃぞ！

Ｂｙ神

「小学校からやり直しですか？」

「？」

「大地ー木の板買いに行くぞー」

っと、荷物の確認をしていたらもうそんな時間か。

「今行きます！」

「なのはも行く！」

「・・・多分つまらないぞ」

「別にいいの。」

もの好きな奴だ

ホームセンターでの買い物が終わり、俺達の前を黒い車が通り過ぎた

中には縛られた女の子が2人と銃を持った男の人が3人いた

これから辿り着く答えは・・・

「誘拐！？」

「大地、急にどうした？」

俺は事情を簡単に説明、転生者の力で助けると伝え、返事を聞かず駆け出した

「止めはしない、ただ。絶対無事に帰ってこい！」

「はい！」

「え！？え！？」

言われなくても！

俺はひたすら車を追いかけた。
暗黒魔術で肉体強化しているので、かなり速い。
ただ、他人からは認識されないように空間に暗示をしているので、
誰も俺に気づいてない。

・・・暗黒魔術、超便利

そんなことを考えていると車は港の倉庫の１つに入っていった。
まだ、様子を見るか？

ｓｉｄｅアリサ
ほっんとにサイアク・・・
すずかとなのはの家に行く途中に誘拐されるなんて・・・

「バニンクス家と月村家のお嬢様か、意外にあっさり誘拐できたな。
あとは、身の代金をたんまり貰うとするか？」

「なかなか上玉じゃねーか・・・」

誘拐犯の１人がいやらしい目をこっちに向けた

「・・・おいおい。お前、趣味わりぃな、ロリコンだったのか？」

「ぐへへ・・・」

きもっ！

本当にこんな笑い方する人いたの！？

「近寄るんじゃないわよ！変態！」

「その強がりも何時まで続くかなぁ～」

「・・・ほどほどにな」

「じゃあ！頂きま～す！」

「イヤァァァ！」

嫌だ・・・誰か・・・助けて・・・！

「こんにちは～！宅配便で～す！」

「!?」

誘拐犯達は一斉に声のした方をむいた
声の持ち主は私達と同じぐらいの少年だった・・・
ｓｉｄｅｏｕｔ

「イヤァァァ!」

悲鳴!?

仕方ない、乗り込むか!

「こんにちは~!宅配便で~す!」

「!?」

ひぃふぃみぃ・・・
１５人か・・・

「誰だ！」

中でもｂｏｓｓっぽいやつが俺に聞いてきた

「宅配便ですって、」

「なら、何を届けにきた？」

周りの仲間が銃を構えた

俺はそれを無視して柱に縛られた２人の女の子を指差して

「代金引き換えです。代金はその子達の解放。」

「ふざけるなぁ！」

「そして荷物は・・・これだよ！」

俺は暗黒魔術を発動した

「月読！」

《１日中剣で刺され続ける幻覚を見る》という暗示を誘拐犯に掛けた

ぶっちゃけナルトの万華鏡車輪眼です

『ギャァァァ！』

おぉ！意外に出来た！

暗黒魔術超便利！

「・・・またのご利用お待ちしています。」

「あんた誰・・・？」

金髪の女の子が俺に話しかけてきた

「転生者だ」

「転生者・・・？」

「そ、」

「ふーん」

「信じるのか？」

「目の前であんな事されたらね」

俺は縄を解きながら金髪少女と話している

「・・・何で助けてくれたの？」

「可愛い女の子助けるのに理由はいる？」

「か、可愛い！？／／」

「あれ？自覚無かった？２人とも可愛いぞ」

「・・・」

あれ？反応が無い？

「おーい、どした？」

「な、何でもないわ」

良しっ！ほどけた

「ほどけたぞ」

「ありがとう。私はアリサ・バニンクスで、こっちは友達のすずか」

「月村すずかです」

「そうか。じゃあな。」

「待ちなさいよ！」

バニンクスに呼び止められた

「名前は・・・？」

「名乗る程のモンじゃない。」

振り返りつつ

「通りすがりのお人好しさ。」

「っ！／／」

あれ？バニンクスの顔が赤い？
いや、多分夕日せいだな

「じゃあな。」

俺はその場を去った

ｓｉｄｅアリサ
「・・・どうしちゃたんだろう、私」

あいつの最後の顔が頭から離れない

心臓の鼓動が早い

顔が熱い

「アリサちゃん？」

「また、会えるかな？」

「？」

あいつにまた会いたい。

そればっかり考えている

「あ～もう！なんなの！」

この気持ちは！

第3話　新しい家族と誘拐!?（後書き）

フラグが立った！

「？どこに？誰が？」

「？」

・・・こいつ馬鹿だ

まあ、とりあえずハーレムにはするつもりだけど。

「誰を？」

・・・

「急に黙ってどうした？」

いや、呆れただけ

「そう言えばこの小説ジャンルはコメディーだったよな？」

まあ、そうだけど

「なくね？」

・・・

「コメディーの部分、無いよね」

うるさい！これからいれるんだよ！

「まあ、がんばれ」

・・・トオルよりも優しい

「先輩が厳しいだけだろ？」

そうだな

じゃあこの辺で！

「「またな！」」

第４話　登場！影の主人公！（前書き）

今回この作品の２人目の主人公が出できます！

「おう！」

後、ＯＰ、ＥＤが決まりました！

「おお！良いじゃん！」

ＯＰ：英雄（ウルトラマンネクサスのＯＰ：ｄｏａ）

ＥＤ：朝ＡＮＳＷＥＲ（銀魂のＥＤ：ＰＥＮＧＩＮ）

だ！

「ＯＰウルトラマンかよ・・・」

英雄なめんな！超かっこいいぞ！

「ならいいけど」

第４話　登場！影の主人公！

おっす！おら高町大地！絶賛説教中だ！

「大地！聞いているのか！」

「・・・すみません」

あの後道に迷って家に帰ったのが夜になってしまい父さんに怒られている。

「まあ、反省はしているみたいだし、今回はこの辺で許す。さあ、飯にしよう。」

「はい」

やっと終わった・・・

～夜～

今日も道場で寝ようとしたが、母さんが

「同い年なんだし、なのはの部屋で寝れば？」

と言ったので、なのはの部屋で寝ることに

・・・安心しろ、俺は昼間のロリコンとは違う

兄貴がうるさかったが・・・黙らせた

んで今は・・・

「なのは、俺は蒲団は無いけど床で寝るぞ?」

「なんで?なのはは別に一緒のベットで寝てもいいよ?」

「いや・・・そういうことじゃあ・・・」

ピンチだ、このままだとなのはと同じベットで寝ることに・・・
もちろん、何もしないが色々とまずい気が・・・
母さん、なぜ蒲団を隠した!

「大地君はなのはと寝るの、いやなの?」

上目づかいに涙目のコンボだと!?
断れない・・・だが!

「だが断る!」

俺の意思は固い!

「・・・お父さんとお兄ちゃんに大地君に［イタズラ］されたっていうよ。」

「すみません・・・」

それは無理・・・

「じゃあいっしょにねるの♪」

「楽しそうだな、おい」

「だって旅行見たいでしょ？」

「・・・」

そうなる？

「じゃあ寝るか・・・」

「うん♪」

俺はなのはとベットに入った

・・・うん。ここだけだといろいろｏｕｔだな

「おやすみ、大地お兄ちゃん」

「・・・お兄ちゃん？」

「うん。」

「別にいいけどよ。」

「じゃあ、おやすみ」

「おう、良い夢をみなよ」

そして眠りについた

〜翌朝〜

「・・・苦しい」

え?何故かって?そんなもん決まってんだろ?

「なのは、起きろ。そして離れろ。」

なのはが俺を抱き枕にしてんだよ
しかも向きあった状態で・・・
ん?よく考えたら超顔が近い!?

「あと5分・・・」

「いいから起きろ!」

返事は無い

「こうなったら!」

身動きが取れない、だが頑張れば寝返りは打てる
・・・なのはごと
みなさん、もうお分かりですな?

「落ちろ!」

寝がえりをとってなのはとベットから落ちた。
でも、それがまずかった

『んん！！』

向きあったままおちたのでそのまま・・・ねぇ
俺がなのはを押し倒してキスをした。みたいな状況になってしまった
しかも最悪なことになのはの服が少しはだけている

「大地君？何をしているんだい？」

「あらあら」

・・・父さんに母さん？
とりあえず俺となのはは高速でなりをただした

「いや、これはちょっとした事故で・・・なぁ！なのは！」

「そ、そうだよ！ただの事故なんだよ！」

「2人でむきになっちゃって・・・大地君、なのはをよろしくね♪」

「ちょ、待ってください！誤解ですって！しかも一応俺となのはは
兄弟ですよ！」

「でも、血のつながりはないじゃない」

「うっ・・・」

「しかたない・・・なのはがいいなら・・・大地君ならなのはをし

っかり守ってくれるだろう。」

「父さん!?そう言うのじゃないって!」

「そうだよ!これは事故なの!」

「ただ、もう少し経たないと籍は無理だぞ」

「違うから!お願い信じて!」

話を聞いてくれぇぇぇぇ!

~食卓~

危ない危ない・・・危うく変な方向に進むところだった・・・

「大地君、なのはがほしくなったらいつでも言ってね♪」

「いやいや、兄弟ですから。しかもなのはの気持ちがあるでしょう」

「うふふ」

はあ、母さん。冗談はやめてくれ・・・

朝の一件のせいで俺となのはの間に流れる空気が気まずくなってしまった

・・・今日から学校だってのに。

「・・・」

「そう言えばもう結構時間たったけど、なのは?学校行かないのか?」

「ふぇ?あ!ほんとだ!もうこんな時間!行ってきまーす!」

世話の焼ける妹だ・・・

「じゃあ、また後でな」

「うん」

こうしてなのはは学校へと出かけた

さて、俺も出るか

~学校~

ｓｉｄｅアリサ

「はぁ~」

あいつ・・・何て名前なんだろう?

「今日はこのクラスに転校生が決ます!」

転校生ねぇ・・・まあ、私には関係ないだろうけど・・・

「じゃあ、入ってきて!」

「はい。」

ん？この声？

「高町大地、なのはとは義兄弟だ。これからよろしくな」

・・・え？

「えええええ！？」

「アリサちゃん？どうしたの？」

「なななんであんたがここにいるのよ！？」

「ん？おお！バニングスか。」

「つーか何よ！なのはと義兄弟だったの！？」

「まあな」

「・・・２人とも知り合い？」

「腐れ縁です。」

「じゃあ、知り合いの近くのほうがいいわね。あなたの席はアリサちゃんの隣ね」

「わかりました」

・・・再会、意外に早かったわね。

「アリサちゃん、すずかちゃんから・・・」

「ありがとう」

なんかすずかが紙切れを回してきたわね？

「えっと・・・」

『探してた王子様が隣になったよかったね。』

ななな何言ってんのよ！？

しかもにこにこしながらこっち見て手振ってるし！

「？どうした？」

「なんでもないわよ！」

「ん？ならいいけど・・・」

ｓｉｄｅｏｕｔ

んで色々あって昼休み！

いろいろ省いたのは作者の都合だ！

「お兄ちゃん、お昼食べに行こう！」

「はいはい」

俺はなのは達のところへ向かえなかった

「あの～どいてくれない？」

クラスの悪ガキどもが道を塞いだのだ

「お前転入生のくせにうちのクラスの３大美女と仲良く昼飯が食えると思ってんのか？」

「？妹と同じとこで飯食って何が悪い？」

「うるせぇ！お前は黙ってここで一人さみしく弁当食べてな！」

「うざ・・・」

「んだと！？」

ここは前世の技で切り抜けますか・・・

（※これはかなりめんどくなるので飛ばしてもらっても結構です）

「なに？君たちは俺が転入生だからといって俺の行動範囲を制限できるの？そんな権限を持ち合わせているのなら校長にその権限の証明書でも書いてもらったか？うん、そんなに自信満々なんだ、きっとあるんだろう。今すぐ見せてくれ。もしないのならそれぐらいの用意をしてから俺に命令するんだな。俺が人である限り、俺の自由と人権は日本の法律の下、認められている。俺が人でないのなら話は別だが。少し話がそれたな、俺が彼女たちと昼飯を食べるのがいけないのは君が勝手に決めただけだろう？法律が、憲法が校則が決めたわけでもない。なら、俺が彼女たちと昼食をとっても問題はない。というわけだ、さっさとそこをどけ屑。」

「ごちゃごちゃうるせー！」

悪ガキの1人は俺の挑発に乗り、俺に殴りかかってきた

バキィ
ドサッ

俺はそれをよけずに食らい、オーバーリアクションをとった

「へっ馬鹿が」

「殴ったよな？俺を？」

「？」

「なら、殴り返されても文句は言えない！」

俺は本気で俺を殴った馬鹿を殴り返した

バァァン！

そいつは吹き飛んで壁にたたきつけられた
周りのやつらがガタガタ震えている

「さあ、まだ殺る？」

『済みませんでした！』

「ＯＫ」

パン、パン、パン

「？」

拍手をしながら俺に近ずくやつがいた
女のように金色の髪を伸ばしているが、男らしい雰囲気のやつだった

「すごいね、君」

「どうも」

そいつは手を出して握手を求めてきた

「俺は影乃終夜（かげのしゅうや）、よろしくな。」

「おう、よろしくな」

俺はそいつと握手をした

「今日の昼食、一緒に良いかな？」

「構わないぜ」

～屋上～

「へぇ～転生者」

「そうだ。信じるか？」

「信じるよ、もともと、俺も忍一族の末裔だし」

「そうなのか！すごいな！」

俺と影乃はすっかり意気投合し互いのヒミツを言い合える仲になっていた

「む～男の子同士でばっかり話して私たちのこと忘れないでよ！」

「悪い悪い」

「ははっ」

俺はこの時知る由もなかった

影乃が俺と背中を合わせて戦う相棒になるとは・・・

第４話　登場！影の主人公！（後書き）

では、キャラ紹介です

影乃終夜（かげのしゅうや）（イメージＣＶ：風間勇刀）

見た目：ロックマンゼクスのジルウェ

装備：クナイ、手裏剣

技：忍体術

「忍者・・・」

中二病な君にぴったりな相棒だろ？

「あれ？デバイスとか魔法は？」

それはおいおい・・・

「ふーん」

じゃあ今回はこの辺で

「「またな！」」

第5話　初戦闘！俺の実力しかとその目ん球に焼き付けな！（前書き）

作：今回から前書きでは名（迷）言コーナーをやることにしました！

大「んでもって、これが記念すべきひとつ目だ！

『トサカに来るぜ！』…プープラ・コカペトリ（ロックマンゼロ４）

大「・・・Ｗｈａｔ？」

作：・・・なぜ？

大「何がしたいんだお前！？」

作：まて！ただてきとうにくじ引きで選んだらこうなっただけだ！

大「ふざけんな！次からはまじめにやれ！」

作：ｙｅｓ，ｓｉｒ！

作：ちなみに今後のデバイスの会話ですが、基本は日本語、セットアップや簡単なものは英語で書きます。

第5話　初戦闘！俺の実力しかとその目ん球に焼き付けな！

～放課後～

「さあ、帰るか。」

「私達は塾に行くから先に帰っててていいよ。」

「わかった先帰るわ。終夜はどうすんの？一緒に帰るか？」

「俺は修行が・・・」

「修行か、なら仕方ないな」

「って何あんたは納得してんのよ！小学生が修行っておかし過ぎでしょ！」

俺はアリサの肩に手を置いて
笑顔でサムズアップ

「気にすんな！」

「そういう問題！？」

「アリサちゃんと大地君仲良いよね。」

「なに言ってんのよ！」

「そう見える？まあ、仲がいいのは良いことだ！」

と言いつつアリサの肩に手を回した
ん?理由?
ノリだよノリ

「!?」

ん?アリサの顔がみるみる赤く・・・

「どうした?」

俺はアリサの顔を覗き込んだ

「!!(顔が近い!?)」

「ん?」

「大地・・・(馬鹿だ)」

「お兄ちゃん・・・(たらしだ)」

「アリサちゃん・・・(良かったね)」

2人共?何で俺から離れる?
すずか?何でそんなにこやかなんだ?

作:あんたが原因だ

「大地の・・・」

「なんだ？アリサ？」

「馬鹿ぁ～！」

「ガハァ！」

いい・・・パンチだ・・・

「「自業自得」」

「青春だね。」

「・・・すずか、オバサンくさいぞ」

「どこが？（黒笑）」

「・・・俺が悪かった」

今日はさっさと帰って仮眠取ろう・・・

～夜～

うん、なかなか楽しい学校だったな、さてもうそろそろ・・・ん？なのはの部屋が騒がしいな・・・

俺は何があったのかを確かめる為になのはの部屋に向かったが、

「なのは？」

どこか急いだ様子で家を飛び出した姿を確認出来た。

・・・世話の焼ける妹だ

「父さん、なのはを追いかけるので、少し出掛けますっと。」

俺は底にあったメモに文を書き残して家をでた

【マスター、なのは様は動物病院に向かったと思われます】

「サンキュー、ガイア。道案内、頼めるか？」

【了解しました】

「あと、マスターじゃなくて大地で良いぜ」

【了解しました。大地様。】

ガイアの声がまんま小十郎だから政宗になった気分だな・・・

「ＯＫ！ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒａｄｙ？」

【無論、何時でも！】

「さぁ！ｐａｒｔｙの始まりだ！」

・・・１度言ってみたかったんだこれ

ｓｉｄｅなのは

何なの？これ？
私は今喋るフェレットを抱えて黒い怪物から逃げてます。
誰か助けて～！

「にゃぁ！」

やばい・・・躓いちゃた！

「■■■■■～！」

「誰か！助けて！」

私は目を閉じた
やられる！
・・・あれ？何も衝撃が来ない？

「・・・俺の妹に手ぇ出したんだ、覚悟はいいな？化け物。」

「・・・大地・・・お兄ちゃん・・・？」

「またせたな。」

大地お兄ちゃんがおそわれる直前に助けてくれたみたい

「安心しな、お前は俺が絶対守る」

「お兄ちゃん・・・」

・・・この状況でそのセリフは反則なの

「にしても」

「なに？」

「・・・お前軽いな」

「ふぇ！」

急になんで！？そういえば今の体制って・・・

「お姫様抱っこされてる！？」

「嫌だったか？悪い、あの状況からだとこの体制が楽だったから。」

「うぅ～」

今朝押し倒されてファーストキス奪われた上に（事故です）お姫様抱っこまで・・・（非常事態です）

「大地お兄ちゃん・・・」

「ん？どした？」

「責任、取ってくれる？」

多分今の私、顔真っ赤なんだろうな・・・

「なんの？」

「いいから！」

「まあ別に構わないけど・・・」

「絶対だよ！」

「？」

アリサちゃんには負けないの！

ｓｉｄｅｏｕｔ

・・・一体何の責任だ？

まぁ、馬鹿な俺が考えてもわからねぇな。

それより！

「なのは、ここから離れろ」

俺はなのはを降ろして化け物を見据えた

・・・ナニアレ？ヘドロ？

「無理だ！魔法が使えない人にジュエルシードは封印出来ない！」

「なら、破壊するまで」

「なっ！」

フェレットが五月蝿いが無視だな

「いくぜ！」

【御意！】

「ガイア・グランザーヴ、ｓｅｔ　ｕｐ！」

「え！？デバイス！？」

ガイアのセットアップにより俺は政宗の鎧を身に纏った

「ん？なんか見慣れた目線の高さ？」

【私をセットアップすると前世の死ぬ直前の体格に変わります。また、１５歳になった時点でその設定は解除されます】

「おお！」

【そんな事より、来ます！】

「っと！そうだった！」

「■■■■■！」

俺はバックステップで攻撃を避け、構えた

「転生者・・・高町大地、推して参る！」

俺は化け物にむかって駆け出し、左右1回づつ切り上げた
その後一度切り下ろし、サイドに動きながら横薙2回・・・
っと！ジャンプで避けやがったよ！
なら、ここは・・・

「対空専用・・・」

平突きの構えをとる。
だが、これはただの突きじゃない！

「牙突参式！」

俺は空中の化け物に斉藤一の牙突を放った
グシャァ・・・
きもっ！刺さった時の感覚きめぇ！

「とぉおりゃぁ！」

化け物はガイアを抜くことが出来ていない
俺はガイアをフルスイングし、化け物を刀から抜きつつ地面に叩き
つけた
俺は急いで刀身を折り曲げる

ガキョン！

「リロード！」

俺は火の弾をリロードした

「炎斬剣！」

落下の速度を加え化け物に刀を振り下ろした

「■■■■■■～！？」

化け物は声にならない悲鳴を上げた

だが、まだ生きている

「止めだ！」

俺が化け物に止めを刺そうとした時、背後から桜色の光が天に向かって伸びた

「なのはか？」

俺が振り返るとアニメに出てくる魔法少女のようなコスプレをしたなのはが立っていた

「リリカル・マジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

【Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ】

なのはの持っていた杖から羽みたいな物が生え、リボンみたいな物を化け物に巻きつけた

すると化け物の眉間に２１と浮かんだ

【Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ】

「リリカル・マジカル、ジュエルシードシリアル２１、封印！」

【ｓｅａｌｉｎｇ】

すると更にリボンが出て来て化け物を貫いた

「■■■■■！」

すると化け物は消え失せて、綺麗な青い石が残った

「なんなんだよ・・・いったい・・・？」

「大地お兄ちゃん、大丈夫だった？」

なのはが駆け寄ってきた

「・・・なのは、言い訳を聞こう。なんでイタいコスプレをしている？」

俺も人の事言えないか？

「イ、イタいコスプレ？君はデバイスを持っているのに知らないのか？」

フェレット？何を言い出すんだい？

「デバイス？なにが？」

「だって、それは・・・」

ファンファンファンファン・・・

「やっば！サツだ！逃げるぞ！」

「わ、わかったの！」

俺はなのはを連れて走り・・・

「誰だ！」

出せなかった。

俺は背後に人の気配を感じ振り返った

「誰もいない・・・？」

「どうしたの？」

「いや、気のせいだったらしい・・・」

いや、嘘だ、気のせいなんかじゃない。
あの一瞬で姿を隠したらしい・・・
いったい誰が？

「とりあえず行くぞ！」

「うん」

俺たちは近くの公園に向かって駆け出した・・・

ｓｉｄｅ三人称

「・・・」

１つの黒い影が大地たちを見ていた・・・
その闇夜に紛れる漆黒の服に身を包み、
月明かりに照らされ、美しく輝く金色の長髪をなびかせながら・・・
≪忍≫その一文字が良く合う

「大地・・・何をしようとしている・・・？」

ｓｉｄｅｏｕｔ

第5話　初戦闘！俺の実力しかとその目ん球に焼き付けな！（後書き）

ガイアグランザーヴはデバイスなのか？それとも？

次回、明らかに・・・

大「いやいや、キャラ説に書いてあったから。」

作：だとしたら、デバイスを使える君にも念話が届くはずだが？

大「言われてみれば・・・」

作：ねたばれは禁止だ。さ～てここらで締めるか？

大「そうだな。」

「「またな！」」

最後の金髪はフェイトじゃありませんよ。
この作品でもフェイトはしっかり女です。

安心してください。

第6話　巻き込まれた？いや、飛び込んだのさ！（前書き）

じゃあ、名言！

『こんなもんじゃ　俺の魂は折れねーよ　』・・・銀時（銀魂）

ほいじゃ！本編、行ってみよう！

第6話　巻き込まれた？いや、飛び込んだのさ！

「ハァッ、ハァッ、ハァッ…」

つ、疲れた…

「大丈夫？」

「うる…さいぞ…イタチ…モドキが…」

あの後なのはの足が予想以上に遅かったので、仕方無く担いで走ったから…

絶賛疲労中だ…

「駄目だ…息が…出来な……」

あ、あの糞神が見えてきた…

「大地お兄ちゃん！？」

「たたた、大変だ！今すぐ治療魔法を！」

短い…2度目の人生だった…

「燃え尽きたぜ…」

真っ白にな…

～しばらくお待ち下さい～

「いや～助かったぜイタチモドキ！」

「いや…フェレットだからね。」

「本来なら今すぐに挽き肉にして食べるつもりだったけど」

「（何で！？）」

「命の恩人にそんな事は出来ない。と、言うわけで事情を聞こうじゃないか？イタチモドキ。」

俺はイタチモドキの首の辺りをつまみ適当なベンチに腰を下ろした

「だから、フェレットだって…じゃあ、まずは…」

イタチモドキ改めてユーノは俺達にこれまでの経緯を話した。

「偉いような、無謀なような…」

「巻き込んでしまってすみません。しばらくして、魔力が回復したら「自分1人で探すってか？」…はい。」

「馬鹿やろう、こっちは巻き込まれただけかもしれんが、巻き込んでおいて放置ってどうなのよ？」

「それは…」

「俺が協力してやる。放っておけるか」

「わ、私も協力するよ！」

「2人とも…」

ユーノはフェレットの姿で器用に土下座した

「本当にありがとう！」

「あ、なのはは協力させないぞ」

「ふぇ！？」

「あたりまえだろ」

「何でなのはは協力しちゃいけないの！？」

なのはは手をブンブンと回しながら異議を唱えた

それに対応してツインテールがピコピコ動いている

…何この可愛い生き物？抱きしめていい？

「あのなぁ、さっきみたいな危険な事を何度もやるんだぜ？死ぬかもしれないんだ、可愛い妹を易々命の危険にさらすわけにはいかないんだよ」

「でもでもでも～」

しつこい！

「なのは、ちょっと立て」

「何？お兄ちゃ…」

俺はなのはを立たせ足払いをして転ばせた後、なのはにまたがり手頃な木の枝を首に突きつけた

「さっきの事に首を突っ込むって事はこれより危険な目に遭うって事だ…いいかこれは警告だ。協力するのは俺だけでいい」

ぷるぷると震えだした…

少しやり過ぎたか？

「…そんな事わかってるもん！」

…コイツ…

「本気なんだな？」

「うん！」

真っ直ぐで迷いの無い目…

「…わかった、ただし怪我はなるべくしないよーに」

「ありがとう！お兄ちゃん！」

そう言ってなのはは俺に飛び付いた

「離れろ！って近！？」

近い！顔近い！

「あの～？ちょっといい？」

「わかったから離れろ！」

「やだ～」

（僕、忘れられてる？あっ…なんか涙が…）

閑話休題

「で？デバイスって？」

「あ、はい。え～っと。基本的に魔導師は・・・」

～長そうなんで飛ばします～

「で？デバイスっぽいガイアを持つ俺は魔導師じゃないの？ってことか？」

「まあ、そんな感じです。」

「で、本当のところどうなの？」

【大地様は魔力を持っていません。≪リンカーコア≫が存在しませんので。ちなみに私は地球の生命力で動いています。強いて言うならデバイスもどきですね。】

「へ～」

「へ～」

「？？？」

あれ？なのはは理解できてないっぽい？

「って！そんなの聞いたことありませんよ！！貴方は何者なんですか！？」

「転生者。」

「しんじられるか！」

お、ナイス突っ込み。

「まあ、話はこの辺にして家に帰るぞ」

「そうだね。」

「ちょ、僕の意見は！？」

「「聞いてない（なの）」」

「えぇ！？」

～高町家～

お？電気がついてますね～

「ただいま～！」

「ちょ、お兄ちゃん！声がでかいってば！（ひそひそ）」

「おかえり、大地。」

「父さん！」

「なのはも。」

「た、ただいま・・・」

「キュ、キュウ・・・」

さぁて、どこから話そうかな・・・

ｓｉｄｅなのは

せっかくヒミツにしようと思ってたのに・・・

「なんで話しちゃうの～！」

「いや、隠しても意味ないし。俺だとすぐばれる。」

なんなの～！

「それより、お前はこれから説教だな。」

「ふぇ！？」

「じゃ、がんばれよ～」

「えええええ～！？」

お兄ちゃんのばかぁ～！！

ｓｉｄｅｏｕｔ

ばたん

俺は自分の部屋に入った

「・・・で？何か用？」

「・・・いつ気付いた？」

俺は窓に寄りかかりおそらく窓の向こうにいる≪ヤツ≫に話しかけた

「さ～て何時かな」

「・・・さっきだな」

「もうばれた！？」

「・・・図星か」

「まさかの誘導尋問！？」

「・・・馬鹿」

「何だと！？」

「・・・要件を言おう」

っと、危うく冷静さを失うところだった・・・

「ジュエルシード、といったな。あれで何をするつもりだ？あれは危険な代物、小学生のてにおれるものじゃあ・・・」

「・・・終夜、俺は普通じゃないんだ・・・」

「！？」

「お前が俺が危険にさらされるのを避けたいってのはわからんでもない。だが、俺なら他のやつが集めるよりも安全なんだ。」

「ならせめて俺も手伝う！俺も普通じゃ「だめだ」・・・」

「これはお前の首を突っ込むことじゃない。」

「俺はつながりを二度と失いたくない・・・」

「終夜・・・悪い。今回のことは忘れてくれ・・・」

「・・・わかった・・・」

いっしゅんの沈黙が流れ、終夜が姿を消した

「・・・行ったか・・・」

悪かったな、終夜・・・

ｓｉｄｅ終夜

俺に・・・俺にもっと力があれば・・・

大地は転生者、おそらく神に何らかの力をもらったんだろう・・・

ならおれもそれに近い≪人ならざるもの≫の力があれば・・・

・・・・チカラか

ｓｉｄｅｏｕｔ

第6話　巻き込まれた？いや、飛び込んだのさ！（後書き）

大「えーっとこれにこれ、それとこれも！」

終「おいおい、持ちすぎだ・・・」

大「だって刹那大先輩のところに行くんだよ！3日は泊まる！！」

終「迷惑だから・・・」

作：あはははは・・・

終「せめてお土産は持っていこう・・・」

大「ガイアのレプリカ！」

作：おいおい・・・

終「忍具一式かな・・・？」

作：すみません前奏曲さん・・・

終「クナイ１００、手裏剣１００、煙玉・閃光弾各2、忍者刀、鍵縄、鍵開け用の針金、大型手裏剣3、兵糧丸１０日分・・・」

作：物騒だよ！？

第7話　みんな！サッカーやろうぜ！（前書き）

作：はーい！恒例の名（迷）言コーナーだよ！！

し～ん・・・

作：・・・大地たちがまだ帰ってこない・・・さみしい。

『悪・即・斬』・・・斎藤一（るろうに剣心－明治剣客浪漫譚－）

作：それじゃあ、本編、どうぞ・・・

注！今回はユーノとアリサのキャラが崩壊気味です。

第7話　みんな！サッカーやろうぜ！

只今、絶賛爆睡中だ・・・
眠い・・・

「ちょっと！授業中よ！起きなさい！（小声）」

ぬぅ・・・小声で怒鳴るとはなかなか器用だな・・・

「寝かせてくれよ～」

「ふざけないで！」

「無理」

ぽてっ

「！！」

あ、柔らかくて暖かい・・・

「ちょ、ちょっと・・・・」

お休みなさーい・・・

そして俺が意識を手放した直後、チャイムが鳴り、昼休みとなった

sideアリサ

まったく、何でこうなるのよ・・・

「すぅ・・・すぅ・・・」

・・・にしても可愛い寝顔・・・

じゃなくて！

「起きなさいよ！」

何で私の膝の上で寝るのよ！

「こんな事なら教科書見せるんじゃなかった・・・」

そう、さっきの国語の時間は大地が教科書を忘れたので『仕方無く』机と椅子を寄せて教科書を見てたの。
だから今大地が私の膝枕で寝てるわけ。

「・・・相変わらずだな、此処は学校だぞ。」

「なによ！終夜！これはコイツが一方的にやってるだけで、私は許可なんてしてないの！」

「なら、さっさと落とせばいい。大地の独断なら文句は言われない筈」

「そ、それは・・・」

「ふぅ・・・だから相変わらずと言ったんだ。」

か、勝てない・・・

「すずか達と屋上で先に弁当を食べてる。」

「え!?」

「だからゆっくりイチャつくといい」

「ちょ、ちょっと!」

ガラッ

「・・・どうすんのよ、これ・・・」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「・・・さい」

アリサ・・・？

「・・・きなさい!」

五月蝿い・・・

「起きなさいよ！」

「・・・起きたけど？」

まだまだ寝足りないんだ。

「つーか柔らかくて気持ちいいな～おい・・・」

俺はスリスリと頬ずりした

「っ！？」

何だろ？

・・・駄目だ、気持ち良すぎる。考える事ができん。

「なにすんのよ！」

「痛い！」

こいつ！殴りやがった！

「んだよ！人が夢見心地で・・・」

衝撃により目がスッキリ覚めた俺は上体を起こすとすぐに状況を把握した

・顔が真っ赤なアリサ
・俺が座っているのはアリサの隣
・さっきの国語の時間から机や席が近いまま
・柔らかくて暖かい感触・・・

結論！

・・・膝枕。

なにぃぃぃ！？

「・・・／／」

「あ・・・えっと・・・」

落ち着け落ち着け落ち着け落ち（ｒｙ

「気持ち良かったぜ！」

そうじゃな～い！（泣）

「・・・そう」

あれ？

「怒らない？」

何で？

「・・・」

・・・駄目だ調子が狂う！アリサっぽくない！

こうなったら・・・俺は変態と呼ばれても構わない！

「また、頼めるか？」

さあこい！俺を殴れ！

「・・・べ、別にいいけど／／」

嘘・・・だろ・・・？

これは嬉し・・・あ、イヤイヤイヤ！

今度は何時・・・でもなくて！

「アリサに何があったんだぁぁぁ！？」

～放課後～

まあ、色々あったけど・・・

ぐぐぐぅ
ッパァン

ヘアバン装着！

「みんな！サッカー！やろうぜ！」

『おぉー！』

今はサッカーだぁぁぁ！

「・・・」

「あ、アリサちゃん・・・」

「あのあと何をしたらコイツがこんな骨抜きになるんだ？」

「むぅ・・・なんか負けた感じがするの・・・」

・・・なにあいつら？見学？

・・・まあ、いいや。

今俺達、翠屋ＪＦＣはサッカーの練習をしている。

但し、ただのサッカーじゃあない！

「風助！」

「はい！」

〔そよかぜステップ！〕

ヒュォォ！

「山本！」

「おう！」

〔ザ・マウンテン！〕

バーン！

「こい！火燃（かねん）！」

「ハァァァァ！」

〔爆熱ストーム！〕

ズドォォ！

「いくぜ！」

〔ゴッドキャッチ！〕

バシィィ！

「なかなか良かったぜ！火燃！」

「次は決める！」

もうおわかりだろう。

コイツらみんな俺の特訓によって必殺技がある。

つまり・・・

「これが超次元サッカーだ！」

「あいつ・・・なにいってんだ？」

「終夜君、気にしたら負けだよ。」

「すずか？それは非道いんじゃ・・・」

～しばらくして～

「試合も近い！今日はここまで！」

『はい！』

・・・その試合負ける気がしないぜ！

閑話休題

～神社～

「わん公が！やんのかこらぁ！」

「ぐるるる・・・」

「わ、わん公って・・・一応ジュエルシードが暴走した姿何だけど・・・」

うるさい！
サッカーの練習後にチームメイトにアリサの事でからかわれて機嫌が悪いんだ！

「噛み殺す！」

「バォウ！」

「か、噛み殺す・・・（汗）」

糞っ！風助のやろう・・・

～回想～

「つっかれたー！」

俺は芝の上に転がった

「お疲れさん。」

「お疲れー」

みんな着替えが終わり帰ろうとしていた。

「あれ？大地、アリサがいるのに膝枕して貰わないの？」

「おま・・・ちょっ！何を急に！？」

『膝枕ぁ！？』

「風助、詳しく聞かせろ。」

「いいですよ～。」

「おいこら、ちょっと待て」

その話はさせるわかにはいかん！

「闇！止めろ！」

「わかった・・・後で聞かせろよ・・・」

それぐらい抜いてやる！

〔影縫い！〕

「あだっ！」

しまった！？油断した！？

「しばらく待ってな・・・」

「闇！放せ！」

くそっ！

「・・・で・・・・・・して・・・」

「ふむふむ。」

「・・・だったんですよ！」

「なにぃぃぃ！？」

「羨ましい・・・」

・・・間に合わなかった・・・

「・・・終わったみたいだな・・・」

闇は俺の拘束を解いた

「大地。」

「・・・急になんだよ」

「式には招待してくれよ。（ｂ＾ー。）」

「ふざけんな！！つーか顔文字！？」

アリサと俺ってどんな組み合わせ!?
有り得ないから!
俺ってモブな顔付きですよ!
釣り合わないから!

「おい!アリサもなんとか言え・・・」

「・・・／／」

何で真っ赤!?

キィィン

「!?」

ジュエルシード!?
助かった!

「悪い。急用思い出した!」

全力ダッシュ!!
カオスから逃げるために!
何故なら、面倒くさいから!

～回想終了～

「・・・よし！封印完了。ナイスだなのは」

「うん！」

「イヤイヤイヤ！戦闘描写無かったから！」

・・・ナニヲイウノカナ？

チャントタタカッタジャナイカ？

「ひくわー」

「ひくのー」

「えぇ！？何で！？」

空気読めよ・・・

作：・・・なんかラッキー？

「作者さんもなにいってるの！？」

「うわっ！電波なセリフ！？」

「ひくのー」

「・・・僕、泣いていいよね？」

作：うわっ！いらないレアカードダブった！？これ強いけど俺使いこなすためのカードが無い！？

「ちょっ！何でカード買ってんの！？執筆中だろ！！」

作：買ってない。開封だ

「ドンマイ作者！」

作：おう！めげないぜ！おれ！

「がんばれなの～」

「（・・・今日の夕飯何だろう？）（現実逃避）」

第7話　みんな！サッカーやろうぜ！（後書き）

大「たっだいま～！！」

作：お帰り！！待ってたぜ！！

大「つ～か刹那先輩強すぎだろ・・・」

作：負けたか？

大「暗黒魔術使って勝てなかった。よぉうし！今から特訓行ってくる！！」

作：ちょっと待てよ！？

大「じゃあ！行ってきま～す！！」

作：・・・行っちまった・・・また一人だけ？

終「いや、俺がいる。」

作：終さん！？

終「しゅ、終さん・・・？」

作：最後のせりふだけでいいんで！一緒にお願いします！

終「別にいいぜ？」

作：よっしゃ！じゃあ・・・

「「またな！」」

大地の身体能力について説明が一切なかったのでここに説明をくわえておきます

異常な筋力を持つ。
スピードは終夜ほどは無いが、常人の４倍ほどはある。
転生前は正拳突きで鉄筋コンクリートの壁を砕き、跳躍は片足飛びで二階建ての一軒家の屋根の上に登れた。
転生により体が小さくなったので今はガイアをセット・アップしないとそこまでのことはできない。
追伸、大地の≪親父≫はこれ以上の異常な筋力があるらしい
・・・どんな親子だ？

こんな感じです。

あと、もう少しで期末試験があるのでしばらく更新はできません。
では、また次回！！

第8話　護る覚悟。（前書き）

お待たせしました～！
ドラクエのデータが消えてショックを受けた作者でーす。

少し遅れたんで、お詫びに3話更新します！！

第8話　護る覚悟。

「ハァァァ！」

「負けるかぁぁぁぁ！！」

ドーン！
バキャッ！！
バチコーン！

「・・・ドッチボールだったよね？」

「大地お兄ちゃんがんばれなの～」

よぉ！
俺、高町大地！
今学校の授業のドッチボールで終夜と絶賛マジバトル中だ！

「おのれ・・・ちょこまかと！」

「ふっ・・・忍の速さをなめるな！」

俺と終夜以外は全員外野だ
俺と終夜が全て倒したからな。

「入り込む余地が無い・・・」

「先生も呆れてたしね」

まだまだぁ！

「負けるかぁぁぁぁ！！」

閑話休題

～校長室～

「スミマセン・・・」

「いやいや、元気な事はいいんだけど。少し、押さえようね。」

・・・やりすぎたか？

あのあと、決着が着かず昼休みに勝負がもつれ込んだんで、気がついたら観客がいっぱい。

そいでその騒動が校長の耳に入ったってわけだ

「・・・」

「・・・」

ぐぬぅ・・・沈黙が痛い・・・

キィィン

「！？」

ジュエルシード！？
クッ！タイミングが悪い・・・

「キャァァ！？」

「すずか！？」

校庭からすずかの悲鳴が聞こえるとほぼ同時に校長室の扉が開いた

「校長先生！急に校庭にへんなロボットが現れて・・・」

「くそっ！」

「大地！待て！」

「終夜はみんなと非難してろ！あと、なのはをに待ってろって伝えといてくれ！」

俺は校長室を窓から飛び出した

「大地君！危ないから戻りなさい！！」

悪い先生・・・俺は止まらない！
校庭には戦隊ものの巨大ロボみたいなやつがいて暴れていた
・・・まだ逃げれてない生徒もいる
しかもすずかが捕まってる

「ガイア！派手にやってあのロボットの気を引くぞ！」

【御意！！】

力がばれるだとか、結界が無いとか関係ない！！
俺はみんなを護る！！

「ガイア・グランザーヴ！ｓｅｔ！ｕｐ！」

俺はガイアをしっかり握る

「リロード！！」

【リロード・・・火、火、火・・・トリプルファイア！ファイアモード！】

火を３つリロードするとガイアから機械的な声が聞こえた
これは最近ガイアに頼んで追加した機能だ
え？理由？カッコイイから。

まぁ、それは置いていて・・・
刀身が赤く変色し炎に包まれる
これは炎系の強力技を出す準備だ！

「いくぜ！ロボット野郎！！」

「・・・・・・！？」

・・・本田忠勝？
まぁ、いいや
俺はガイアを振りかぶり、技を放つ

〔ＰＵＲＯＭＩＮＥＮＳＵ（プロミネンス）！！〕

太陽の紅焔の名を持つこの技は相手を『焼く』なんて生易しい技じゃない
相手を『焼き尽くし』、『破壊し』、『蒸発』させるための技だ
・・・まあ、機械相手じゃそこまでは無理だな
この技見た目が派手なんだよ
俺がガイアを地面に叩きつけると地面が割れはじめそこから灼熱の炎がアーチ型を何度も描いて地面を跳ねるようにロボに迫る！

ブォワァァァン

ＰＵＲＯＭＩＮＥＮＳＵ（プロミネンス）がロボに直撃しバランスが崩れ、すずかが放り出された

「っ！？間に合え！」

俺は全力ダッシュですずかのもとへ駆け寄る
届け！
俺はヘッドスライディングですずかが落ちてくる地点に滑り込んだ

「てぃぃりゃ！！」

「きゃっ！」

あ、危ねぇ～間に合った・・・
１５の体で良かった・・・

「大丈夫か？」

「う、うん・・・」

・・・怪我がなくて何よりだな

俺はすずかを立たせた

「・・・もしかして、大地君？」

「もしかしてじゃなくて大地だ」

「な、何で大きくなってるの？」

・・・っと、そうか。ガイアで成長してんのわからんわな

「詳しく話は後な。今は逃げとけ。」

「大地君はどうするの？」

「俺は・・・」

俺は体勢の直ったロボを睨んだ

「俺はあいつを倒す」

「む、無理だよ！」

「安心しな」

俺はすずかの頭に手を乗せて笑った

「お前も、学校のみんなも、俺が護る。」

「！！／／」

俺は少しすずかの頭を撫でるとロボに向き直った

「・・・待たせたな」

「・・・」

「これ以上、お前の好きにはさせねーよ、ロボット野郎。」

「・・・」

俺はガイアの刀身を折った

・・・火は効かないな。

だったら！

「リロード！！」

【リロード・・・雷、雷、雷・・・トリプルサンダー！サンダーモード！】

こいつでっ！！

〔牙突雷式！！飛雷牙突！！〕

バチバチィッ！！

俺は牙突に雷を纏わせ、それをロボに飛ばした
それは一筋の光を残しロボを貫い・・・

あれ！？傷一つ無い！？

「嘘だろ！？」

【大地様！！どうやらあのロボは本体ではないようです！！】

「まじ！？じゃあどうすんの！？」

【本体の反応はロボの中心部分・・・コクピットです！！そこだけ少し防御が薄いようなのでそこを壊して本体を引きずり出すしか・・・】

「クッ！だったらもう一度飛雷牙突を！？」

急に力が抜けて膝を着いた

「ぐっ・・・」

【先ほどの終夜様との勝負に加え、弾を6発も使ったんです!!これ以上は「何発だ?」・・・なにをする気ですか?】

「後何発リロード出来る?答えろ。」

【・・・3発・・・それ以上は命に関わります】

3発か・・・

「・・・」

【大地様!!来ます!】

ロボの拳が俺目掛けて振るわれた

「縮歩!」

目にも写らない速さのステップでその拳を避け

水の弾を3つ握る

相手の関節部分にそれを投げ、もう一度弾を握る

・・・ミサイル

縮歩デ回避

関節二投ゲ、弾ヲ握ル

「・・・？」

関節二・・・

ｓｉｄｅ終夜

大地の動きが変わった？

無駄な動きが一切無い・・・

それに加え、迷わず相手の攻撃に飛び込んでる・・・

なんか、そう

・・・感情が無い機械・・・

・・・凄いな。

それに比べ俺は・・・！

俺は手から血が出るほど強く拳を握った

ｓｉｄｅｏｕｔ

・・・っふう。

よし、彼奴の関節部分は全力濡れたな。
後は！
俺は氷の弾を６つ握った
もう一度あれを・・・
「縮歩！」
懐ニ潜リ込ム
肩、肘、膝ニ弾ヲ投ル・・・
ピキィィ！！
・・・っふう。よし、命中。
関節部分を凍らせたから彼奴は動けない！！
んで！
「リロード！！」
【リロード・・・雷、雷、雷・・・トリプルサンダー！！サンダーモード！！】
「コイツで終わりだ！！」
〔牙突雷式！！迅雷牙突！！〕

俺はロボに向かい突撃した

でも、

「・・・！！」

ガキィィン

「プロテクションだと！？」

ぐらっ

「っ！？」

「・・・！！」

砲撃！？

「くそっ！動け！！」

だめだ！力が！！

せめて・・・

「暗黒魔術！」

俺は暗黒魔術で目の前に障壁を張った

薄い！？これじゃあ防げない！！

「・・・・・・！！」

「グァァァ！！」

砲撃が直撃し俺は力無く地面に落ちた

「く・・・そ・・・・」

俺は負けるのか？

みんなを守れないのか？

氷を砕き、自由になったロボが俺の前に来た

その時・・・

「だめぇ！！」

「すずか！？」

すずかが急に俺の前に飛び出してきた

第8話　護る覚悟。（後書き）

作「ぼろぼろじゃないか！？」

大「俺弱い？」

作「それでもチート主人公か！？」

大「すまん。」

作「と、この後書はここまで。次のお話で！」

第9話　強く・・・（前書き）

さて！2話目です！

第9話　強く・・・

ロボが俺たちを踏み潰した
・・・はずだった

（動きが止まった！？）

「・・・！？」

ロボはすずかの姿を見て固まっていた

「・・・やるなら今しかない！！」

【大地様！！何を！？】

「オーバーリロード！！」

俺はガイアの制止を無視して雷の弾を“５つ”握った

【オーバーリロード！！！！雷×５！！フルドライブ・サンダー！！】

「貫け・・・」

オーバーリロードされた雷はガイアを包み込んでさらに、長く、鋭くなった

〔迅！！〕

突きの構え

〔雷！！〕

雷が激しく唸る

〔一！！〕

足腰に力を込める

〔閃！！〕

俺の視界はモノクロになり、世界は高速で流れ、次に世界が色を取り戻した時には俺はロボを貫いた後だった。

「いよっし！！」

【大地様！！ロボが後数秒で爆発します！！】

「じゃあ、早く！？」

ヤバい・・・動けないや

【大地様!!早く!?】

すずかも巻き込んじまう・・・

くそっ・・・

【大地様!?】

俺の意識はそこで途絶えた

side終夜

「っ・・・間に合え!!」

俺は気がつくと走り出していた

・・・何となく

何となくだが、大地が動けなくなっている気がしたから駆けつける用意はしていた

ロボを貫いた後、大地が気絶。

そして気がついたら駆けだしていた

「仕方ない・・・」

〔忍体術・疾風（はやて）！！〕

俺は手で印を組み、“気”を練り上げた
それを足に集めて

（地面を蹴るときに・・・）

解き放つ！！

すると、１５m程さきのすずかの本に一瞬でたどり着いた
そしてすずかを抱えて大地に向かい跳んだ
俺は大地をすれ違い様に大地を抱えた
その直後、ロボが大爆発し、俺達はギリギリ助かった・・・

「危なかったな・・・」

さて、次の問題は・・・
俺は地面に着地するとすずかを立たせ、大地を寝かせた

「終夜君・・・？あなたは・・・何者なの？」

「・・・それは後で」

俺は大地の様子を調べた
すると・・・

「ごふっ！！」

「！？」

吐血！？

【大地様！？大地様！！大丈夫ですか！？】

「なんだ？刀が喋った・・・？」

【終夜様！！説明は後でします。今は大地様の治療に協力してください！！】

「とりあえず、わかった。俺はどうすればいい？」

【先ずは私を大地様の横で地面に突き刺して下さい。】

俺が言われた通りにやると大地を温かい光が包み込んだ

【これで傷はゆっくりですけど、癒えます】

「・・・じゃあ次は俺が治療させて貰おう」

俺は気を練り、大地に流し込んだ

【す、凄い・・・大地様の治癒速度が格段に上昇した・・・】

「気には与えた者の生命力を一時的に高める。まあ、俺のは生命力を“弱める”事も可能だが。」

まぁ・・・好きな力じゃないけどな。

「さて、お前はなんなんだ？」

【・・・わかりました。全て説明しましょう】

俺はガイアから大地の力について詳しい話しを聞いた

【・・・以上です】

「神の与えた力・・・」

そうか・・・俺が彼奴の隣に立って、彼奴を助け、護るには人智を超えた力が必要なのか・・・

俺にその力が、

俺は気絶している大地を見ていた

その力があればこんな事にはならなかった・・・

【終夜様・・・】

「・・・んぅう・・・」

「大地！？」

「あれ？終夜？」

「気がついたのか・・・」

【大地様!!】

「わりぃ、心配させたか?」

「まったく、お前は・・・」

普通こんな早く起きないぞ

まぁ、一安心かな?

sideout

「・・・とりあえずシードの封印を」

俺は痛む体を無理に動かしシードのもとに向かった

シードは光を失ったまま、地面に落ちていた

「あれ?光って無い?」

【おそらく、あのロボに全ての力を使ったのでしょう】

「・・・道理で強いわけだ」

俺はガイアでシードに触れ、しまった

「・・・?人形?」

「これ・・・！？」

「どうした？」

すすかは俺が見つけた人形を拾った

「この人形は昔私がよく遊んでたお気に入りの人形でね・・・」

すずかは人形の頭を撫でながら

「最近無くして、探してたんだ。」

「なるほど」

あそこでロボが攻撃を中断したのはすずかがきたからで、あのロボを動かしたのが・・・

【この人形ですか】

「多分、捨てられた。と思って、主人の本に戻りたいっていう願いが強かったんだろ」

俺の推測が終わるとすずかが近寄ってきた

「大地君・・・」

「何だ？」

「助けてくれてありがとう。」

「前に言ったよな?可愛い女の子助けるのに理由は要らないのさ」

「・・・その笑顔はズルいよ・・・／／（ボソッ）」

「で、すずか。」

「?」

「体が動かないんだ。終夜、呼んできてくれね?」

ドサッ

「大地君!?」

俺はそれだけ伝えると地面に倒れ込んだ

【無茶し過ぎです】

「うっせぇー」

・・・校長達になんて説明するか?

・・・いや

悩む必要なんて無い。

全部ハッキリ言うだけか・・・

ただ・・・巻き込んじまったなー

コレじゃあ力を貰った意味がない

強くならなきゃな。

とりあえず、

今は寝るか。
俺は近づく終夜の姿を確認して意識を手放した

ｓｉｄｅ終夜

「無茶しやがって・・・」

俺は大地を背負って学校へ歩き出した

「大丈夫なの？」

「多分、な。疲れただけだろう。」

少しオロオロしていたすずかは俺の一言で安心したみたいだ

・・・コイツはとんだ女たらしみたいだな

・・・本人無自覚の

第9話　強く・・・（後書き）

作「しまらない主人公でした。（笑）」

大「もうしばらくしたら、今回出た技とかの説明を加えたキャラ紹介をするぜ！」

第１０話　ココロノヤミ（前書き）

今回の簡単なまとめ

校長がかっこいい！？

イナズマ！？

大地のキャラが！？

新キャラ？

ラッキースケベ！

です。

※終夜と話す『』の部分は子安の声で脳内再生お願いします。

第10話　ココロノヤミ

・・・ここは？

「気がついたみたいだね。」

「ふぁ～あ」

むぅ・・・どうやらここは学校の保健室らしいな

「で？校長はなにを聞きに？」

「単刀直入に言おう。」

校長は一層険しい顔をした

「君は何者だい？」

「・・・信じてくださいよ」

俺はゆっくりと今までの事を話した

「んで？どうします？学校から追い出しますか？」

「・・・そんな危険な力は学校に置いておくままには出来ない。」

「ですよねーだっ「ただ、」・・・？」

校長はにっこりと笑った

「君のその力は私達と学校を守ってくれた素晴らしいものだ。危険な力でも、君みたいな人が使ったら人を『守る』事ができる。」

「君は私達の生徒（教え子）だ。学校（ここ）に居て悪い訳がない」

「校長・・・」

「今日は帰ってゆっくりするといい。今日の授業は中断だ。また、元気に登校して来てくれ。」

「・・・はい。」

この世界の住人は心が広いな。

～日曜日～

まあ、土曜日は破砕と暗黒魔術の特訓に一日中瞑想してた
どうやら、破砕も暗黒魔術も、この世界の魔力とは違う魔力を使うらしい。また、魔力の使用にも体力は使う
それを知らなかった俺は行動全てにいちいち魔力を使っていた、だからロボ戦で体力兼魔力切れになったらしい
つーわけでしばらくは瞑想だな。うん。

「と、言いつつ。俺はフィールドに立っていた」

「なにいってんだ?」

「キニスンナ」

「片言?」

はい。今日は翠屋ＪＦＣ対不思議サッカー研究隊の試合の日です。
なんだ?不思議サッカー研究隊って?
つーわけで今からキックオフ

「大地ー!!活躍したらお前の前欲しがってたパソコン買ってやるぞー!!」

「気合い入って来た～!!（」　°□°）」」

「大地！？」

俺は審判に駆け寄った

「たんま！選手交代！！」

「え！？」

「竜！俺が変わりにフォアードに入る！！勇助！！変わりにキーパー入れ！！」

「お、おう」

「は、はい！！」

「奴らに格の違いを教えるぞ！！」

『お、おう！！』

そしてパソは俺の物だぁ！！

フォーメーション

ＦＤ　火燃　大地

ＭＦ風助　闇　林道

ＭＦ　雷戸　光

ＤＦ水木　山本　真条
ＧＫ　勇助

ホイッスルが鳴り試合が始まった

「跪けぇ！！」

ボールを少し浮かすと大地が鳴動し光が右足に集まる

〔ガイア・ゼロ！！〕

右足に集まった大地の力を解放しボールを蹴った
大地を大きく抉るシュートは最早砲撃と呼べるものだった

ごばぁぁぁん！！

「ご、ゴール！！」

「フハハハハ！！泣き叫べぇ！！」

～応援席～

「お兄ちゃん・・・怖い」

「後でお話ね。」

その後・・・

〔グランド・ファイア！！〕・・・火燃

「ギャァァァア」

〔ダーク・フェニックス！！〕・・・闇

「へぶらぁぁぁ」

〔ガイア・ゼロ！！〕

〔ガイア・ゼロ！！〕

〔ガイア・ゼロォ！！〕

「イヤァァァア！！」

「フハハハハハ！！足掻け足掻け！！
全てこの私が破壊し尽くしてくれるわ！！
クハハハハ！！ハーッハッハッハー！！」

『キャラ崩壊！？』

で、結果
翠屋ＪＦＣ対不思議サッカー研究隊
３６１対０

「ハーッハッハッハー！！我は破壊者（メシア）だ！！」

得点王
３４７点・・・高町大地

「よくやったぞ。大地。」

「これでパソ買ってくれるよね！！」

「勿論だ」

「やたー！！」

「さあ、みんな今日は良く頑張った。翠屋で昼飯だ！」

『きたぁぁぁ！！』

「よし！！いくぜ！」

がしぃ
？両肩を捕まれた？

「お兄ちゃんは」

「ちょっとお話だよ？」

「ふ、２人とも？」

目が光ってないよ？

「「覚悟はいい？」」

「ぬぅ・・・仕方ない・・・」

モードチェンジ。

「全ク、コンナ事ニ利用スルナヨ・・・」

「あれ？雰囲気が？」

「俺ハ剣・・・イヤ、今ハ大地カ・・・ノ半身、ブレイ。二重人格ダ」

「ふぇぇぇぇ！？」

「悪イガ見逃シテヤッテクレ。彼奴ハ彼奴ナリニ息抜キガ必要ナンダ」

「ん？今あんた大地を剣って呼ばなかった？」

「気ニスルナ。」

その頃・・・

ｓｉｄｅ終夜

俺は今公園を散歩している

考えているのは一昨日の事

昨日一日中家の忍の秘伝書を読んだが、人智を超えた力は無かった

「・・・どうすれば」

俺が途方にくれていた時、頭に声が響いた

『力が欲しいか？』

「！？誰だ」

俺が周りを見渡すと世界の色が変わり、俺以外の動きが止まった

『力が欲しいか？』

「・・・ああ」

『貴様は何故力を欲する？』

「繋がりを、友を守るため」

『そのために自分がこの世界から外れた存在になってもか？』

「力が手にはいるなら！！」

『・・・いいだろう貴様に力をくれてやる』

俺の前に光り輝く青い石が現れた

「ジュエルシード！？」

『さぁ、その石を握り、願うのだ。』

『力を寄越せと』

「・・・力が手に入れるなら・・・」

「俺は悪魔にも魂を売ろう！！」

俺は石を強く握り締め

強く願った

「俺に力を！！」

俺は黒い光に包まれた・・・

ｓｉｄｅｏｕｔ

「気持ちいい～」

「たまには親子で風呂もいいだろ」

「ですね～」

今俺は父さんと絶賛入浴中だ。
たまにはいいもんだな

ゾワァァァ！！

「！？」

「ん？大地？」

「今のは・・・ジュエルシード！？」

俺は急いで風呂場を飛び出し、なのはのもとへ行った

「なのは！！今ジュエ・・・」

あぁ・・・なんてバットタイミング

なのはもさっきの感覚に気づいたらしく
着替え中でした

「だ、大地？服は？」

「あ」

俺は風呂場から急いで来たので全裸
つまり、男の大事なところもノーガード

「キャァァァ！！」

「へぶらぁぁぁ！！」

今のは完全に俺が悪いな。うん。

～しばらくして～

「ガイア、反応は？」

俺達はガイアのレーダーを頼りにジュエルシードを探している
わざわざレーダーを使う理由は・・・
大規模な事件が起きておらず、場所がわからない。というのがある

【公園です。ただ・・・】

「ただ？」

【既に結界が張られており、中に人・・・終夜様の反応があります】

『!?』

「急ぐぞ!!」

俺達は全速力で公園に向かった

~公園~

「・・・ついたな」

公園の真ん中には終夜が立っていた

「終夜!!」

「・・・大地か」

「良かった。無事みたいだな。ジュエルシードを見なかったか?」

「・・・ジュエルシード?コレのことか?」

終夜は青い石を俺に投げた

「!?」

「何でお前が持ってるんだ?とでも言いたいのか?」

「大地！大変だよ！」

「ユーノどうした！？」

「このジュエルシードは力が抜けてる・・・ただの石になってるんだ！」

「まさか！？」

俺は終夜を見た

最悪のパターンなのか！？

「お前は・・・俺に力が無いと言った。」

終夜はゆっくりと右手を上げる

「だから俺は力を求め」

肩の高さまで上げ、手を止め

「この力を手に入れた！！」

強く手を握りしめた

「終夜！！そんな危険な力に頼るな！！」

「・・・闇の力は闇に生きる俺が全て消す。」

「終夜・・・」

「構えろ大地。俺の力を見せてやる」

「終夜！！」

【大地様！！説得は倒してから出なければ効果が薄いようです！！】

「やるしかないのか・・・？」

「ガイア・グランザーヴ！！ｓｅｔ・ｕｐ！！」

俺はガイアを構えた
するとなのはが隣に立った

「私も協力するね。」

「いや、お前はさがっ「同時に来い」なんだと！？」

「いくぞ」

終夜は右手を前に出した

「シャドウ・・・ｓｅｔ・ｕｐ・・・」

「「！？」」

黒い影が終夜を包み込んだ
次第に人影を形作り、黒さが引くと、底には成長し、更にバサラ２の猿飛佐助の衣装ｖｅｒ２を纏い、腰に大手裏剣を付けた終夜が立っていた

「驚くのはまだ早い」

更に、終夜は幾つかの印を結ぶと影で出来た分身を作り出した

「「さあ、これで2対2だ」」

終夜は腰の手裏剣を手に取り、構える

「油断するなよなのは・・・」

「うん・・・」

「勝って終夜の目を醒まさせる!!」

ここに・・・忍と転生者の闘いの火蓋が切って落とされた!!

第１０話　ココロノヤミ（後書き）

作「う～ん微妙・・・」

大「終夜が魔法の力を手に入れた・・・？かなりの強敵だな。」

？？？『ちょっと～俺様の出番もっと増やしてよ～』

大「誰！？」

作「君は一応キーキャラの一人なんだから、増えるよ。」

？？？『マジで！？俺様大感激～』

つーわけで、今回はここまで。

感想やらなんやらお待ちしてまーす。

第１１話　人生は不完全だからこそ楽しい。（前書き）

はい。連日投稿です。

う～ん戦闘描写が難しい・・・

後、後書にちょっとしたアンケートみたいなものがあるんで協力お願いします。

※終夜の分身の声は子安さんで（笑）

第１１話　人生は不完全だからこそ楽しい。

大地対終夜

「ハァァァァ！」

「遅い」

ガキィン

「まだまだぁ！！」

俺は終夜に対し高速で斬撃を与え続けた

ガキキキキキン！！

終夜は全て一歩も動かず防ぐ

「そこ。」

「っ！！」

どごっ！

斬撃をよけた蹴りを放ってきた

俺は防御出来ず、まともに食らい、後ろにとばされた

「強い・・・」

「・・・」

「でもよ・・・」

「!?」

終夜の足元には大量の火の弾が落ちていた

「こいつでどうだ!!」

ズドォォォン

火の弾は爆発を起こした

「よし!!」

「・・・何がよしなんだ?」

上から終夜の声が聞こえ、見上げると宙に浮く終夜がいた

「飛んでる!?」

「此方からいくぞ・・・」

終夜が印を組むと5つ大きめの漆黒の魔力弾が現れた

「魔法!?」

〔影の弾（シャドウショット）〕

終夜が手を此方に向けると魔力弾が此方に迫ってきた

「（速さはそこそこだな・・・なら！！）擬似移転（ジャンプ）！！」

俺は魔力弾を引き付けてから暗黒魔術で終夜との距離を縮めた

「牙突参式！」

「あまい。」

終夜は牙突を受け流した

ドドドドドン

「かはっ・・・つ・・・いび弾・・・？」

先ほどよけた弾が後ろから直撃した

〔忍体術・・・浮雲・乱空〕

ドカッ！！バキッ！！ズドッ！！ガッ！！ゴン！！

終夜は追い討ちに5連続の足蹴りで俺を叩き落とした

「俺はお前を超えた・・・これからは俺がお前を護る」

ｓｉｄｅなのは

なのは対分身

「いやーまさかこんな事に成るとは思わなかったな～」

「え、えーと・・・」

「油断しちゃ駄目だよ・・・何かを狙ってるのかも・・・」

「いやいや。なーんにも狙って無いから。お嬢さんもそんな構えなくてもいいって・・・」

な、なんか調子狂うの・・・

「俺は戦う積もりはないんだよ。」

「・・・」

「俺はジュエルシードの中の『意思』で、ちょっとした目的があって宿主を探してたのさ」

嘘臭いの・・・

「俺はジュエルシードの意思の唯一の光でさ。他の闇の意思を抑えたいだけなんだよ・・・おねがーい信じて～」

「「・・・」」

「酷い！！そんな目で見ないで！？俺様泣いちゃうよ！？」

・・・うざっ

「レイジングハート？」

『な、何でしょう・・・』

「ディバインバスター撃って良いよね？」

『マ、マスターしかし・・・（ブルブル）』

「い・い・よ・ね？」

『ａｌｌｒｉｇｈｔ！！』

「・・・ディバインバスター！！」

「え！？ギャァァァ！！」

「・・・ご愁傷様・・・」

スッキリしたの！！

そうだ！これからは悩んだらディバインバスターでスッキリするの！！

作：テレテッテテ～♪なのはは魔砲少女に転職した。

「話し・・・聞いてくれよ・・・（ガクッ）」

sideout

大地対終夜

「・・・な」

「!?」

俺はガイアを杖代わりにし立ち上がった

「ふざけんなよ・・・」

「（あれだけの攻撃を受けて立つのか!?）」

「力が有るだけで人が護れるのか?違うだろ?」

暗黒魔術で自身の治癒力を全開にして傷を少し治した

「大事なのは心だろ!!」

「・・・知ったようなことを言うな!!」

「!?」

「力だけで人が救える訳じゃ無い事ぐらい知ってるさ・・・力で人が傷つくことも・・・」

「だったら何故力を求める!?」

「繋がりを守るためだ。」

「？」

「お前みたいな奴には解らないだろう。繋がりを失う辛さが・・・」

「大切な繋がりを自分で断ち切ったつらさがな!!」

「自分で断ち切った・・・!?終夜・・・一体何が・・・」

「貴様に何が分かる！？」

終夜は俺に大手裏剣を投げた

「ちっ・・・」

がいん！！

俺は大手裏剣をガイアで弾いた

「たたみかける！！」

終夜は魔力で大量のクナイを作り出した

〔シャドウダガー！！〕

「リロード！！」

【リロード・・・氷、氷、氷・・・トリプルアイス！！アイスモード！！】

〔凍り付く波動！！〕

俺はガイアから衝撃波を出し、シャドウダガーを凍らせた

「オーバーリロード！！」

【オーバーリロード！！！！雷、火、雷、火、光！！Ｔｈｅ・ｌｅｇｅｎｄ！！】

「闇を滅ぼせ！！」
聖なる雷火がガイアを包んだ
〔ギガスラッシュ！！〕
「ぐぁっ！？」
聖なる斬撃が終夜に当たり、終夜がのけぞった
ここでたたみかける！！
〔シャイニング！！〕
俺はガイアを掲げた
そこから光が発生し公園全体を包み込み終夜を攻撃した
「ぐぅぅぅ・・・」
この攻撃はジュエルシードの力を低下させ、暴走を止める力がある、
これで！！
「まだだぁ！！」
だけど終夜の変身は解けていなかった
「嘘だろ！？暴走が止まらない！？」
「当たり前だ・・・俺は力を使いこなしてる。」
「！？」

「これは俺の意志だ！！俺は俺の意志でお前と戦う！！」

「影の弾（シャドウショット）！！」

「ぐぁっ！！」

俺は避ける事が出来ず、もろに攻撃を食らった

「ハァッハァッハァッ・・・」

「フーッ・・・フーッ・・・フーッ」

「次で決める・・・」

「いい加減めぇ覚ませよ・・・」

俺も限界ギリギリ・・・
次で決めるしかないな

「リロード・・・」

【リロード・・・雷、雷、雷・・・トリプルサンダー！！サンダーモード！！】

「忍体術・・・奥義・・・」

〔牙突雷式！！雷牙！！〕

〔影斬り！！〕

ガキィン!!

技を打った直後俺たちは場所が入れ替わり背中を向けあって立っていた

「・・・俺の勝ちだ」

終夜はその場に倒れ・・・

「と、言いたいけど引き分けかな?」

俺も倒れた。

「俺は・・・弱い・・・」

「なあ、終夜・・・なんでそんなに力にこだわるんだ?」

「・・・俺は自分の手で大好きだった両親を殺した・・・」

「!?」

「俺は・・・両親から忍の技を教えてもらった・・・」

俺の一族は忍の技を受け継いできた。
しかも俺たちはその中でも特殊で“気”を使った技を使える一族だった
まあ、一族といっても生き残っているのは俺たちだけだったが。

俺は両親に沢山の愛情を注がれて育った
俺は気の扱いに天性の才能があった。
俺は両親に褒められるのが大好きだった。
で、ある時。俺は両親に褒められるため身の丈に合わない技の習得をしようとし
・・・・・・暴走した。

しかも気が暴走するだけで偶然自我が飛ばなかった。

だから俺は俺がこの手で両親を殺した瞬間を今でもはっきり覚えている

俺はしばらくショックで立ち直れなかったがあるとき家の地下室に迷い込んだ

そこで俺は家の掟を発見した
本来は相当な量の気と技術がないと読めないのだが俺はそれを完全に理解できた

そこにはあることが書いてあった

忍の力を学ぶ者には1度身の丈の合わない技に挑戦させ、技の危険性を体に覚えさせろ。と

どうやら俺はその試練をやらされた時に両親を殺したらしい
本来なら死ぬことは無いのだが・・・
俺の持っていた中途半端な力のせいで両親は死んだんだ。

しかも掟の中には
忍に重要な冷酷さを手に入れるため必ず親を自らの手で殺させろ。
と書いてあった

俺は正直絶望した。
俺はこの力は人を守るものだと信じてたからな。

俺は決意した。
中途半端じゃない、完璧な力を手に入れて
こんな掟のある『闇』の力は同じ『闇』に生きる忍の俺が消す！

「そんなことが・・・」

「だが結局『完璧な力』なんて・・・」

「完璧なんて楽しくないぜ？」

「？」

「完璧になっちまったら他人とのかかわりが無くなる。成長が無くなる。」

「人生も、世界も不完全だから楽しいんじゃね？」

「！？」

「自分に足りないなら他人に頼ればいい。な？」

「・・・ああ、そうだな。」

「だろ？」

（・・・俺がこいつに勝てるわけがないな・・・）

「へへっ！！じゃあ終夜！！俺から頼み事だ！！」

「なんだ？」

「ジュエルシード集め、手伝ってくれるか？俺にはお前の力が必要だ。」

「！？・・・ああ！！」

「・・・なんか俺たちの出番少なくね？」

「気にしちゃいけないの。またディバイン・バスター撃たれたくないなら黙ってようか？」

チャキ・・・

「すんませんでした～！！」

第１１話　人生は不完全だからこそ楽しい。（後書き）

終夜との和解！！

そして終夜の設定が色々めんどい！！

大「次回はキャラ説明で～す」

終「技の詳しい説明とかがあるぜ」

んで、アンケートってのは・・・
プレシアを生かすかどうかです。

プレシアがいるかどうかでこの後の話に影響が出るんで・・・

じゃあ！お待ちしていま～す！！

オリキャラ図鑑？　（１１／２７更新）

高町大地

見た目

円堂大人版の髪型にロックマンＺＸのヴァンの顔を組み合わせた感じ。なお、瞳の色は茶色。

なんだかんだいって意外にイケメン。

理由は神がめんどくさがって前世の体を流用したため。

自身の気の量はほぼ無限。但し、体がそれにリミッターをかけている。通常時でも常人の１０倍以上の気がある。終夜の感じた気の量は大地の気のすべてのほんの一部にすぎない。

技

牙突…形により様々に変化する平突き。大地はよく使用する

ＰＵＲＯＭＩＮＥＮＳＵ…ガイアを叩きつけ太陽のプロミネンスを擬似的に発生させ攻撃、攻撃射程圏は高さ１５ｍ距離２０ｋｍ。火の弾３個使用

凍り付く波動…ガイアから衝撃波を飛ばし、当てた物を凍らせる。氷の弾３個使用

ギガスラッシュ…某有名ＲＰＧの技そのまんま。Ｔｈｅ・ｌｅｇｅｎｄでないと打てない。

同系統にギガブレイク、ギガクロスブレイクがある。

ｌｅｇｅｎｄ1度にギガスラッシュは4発撃てるが、

ギガブレイクはギガスラッシュの2倍、
ギガクロスブレイクは4倍のエネルギーを使う。

シャイニング…あの神作ゲームの主人公の技、浄化作用がある。

縮歩…縮地のステップ版、大地は縮地を使用出来なかったので仕方無くこうなった。

破砕（クラッシュ）…フェアリーテイルの魔法の1つ。触ったものを壊す力がある。

暗黒魔術…自分の視線を媒体とする魔術攻撃。使用時のみ瞳の色が深緑色になる。

ダッシュパンチ…高速の踏み込みからパンチへ繋げる。専制に持って来いの技。

但し、攻撃の筋は単純なので防ぎやすい。

Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ

スーパーモード…体にかかっている気のリミッターを1つ解除した状態。
使える気の量が上昇し、身体強化がされる。
髪と眉毛が金色に光り、瞳が翡翠色に。名は、スーパーサ○ヤ人から。

他のキャラからの一言
S「賑やかなやつだよ」
A「一緒にいると楽しいわね。」
N「自慢のお兄ちゃんなの！」

影乃　終夜

見た目
ロックマンZXのジルウェ。ただし、眼鏡はつけていない。

性格
冷静沈着。親を殺していて、自分の力を含め、闇の力を嫌っている。大地のよき理解者で。大地との勝負の後力に対しての考えを改め、もともとその雰囲気があったのだが、バトルマニアになった

ジュエルシードにより魔力に目覚めた。自分の魔法に気を混ぜることによりベルカ式でもミッド式でもない魔法を使う。最大の特徴として、魔法の使用時に魔法陣が出ないことがあげられる。

気の量はかなりあるほう。ただ、どちらかというと、大量に開放するよりは細かく操作するほうが得意。なので、魔法との併用は威力の底上げになっている。

両親を殺してしまった原因の忍術の副作用で、精神年齢が小学3年

生にしては高め。家事全般は得意である。

技

忍体術・疾風…気を脚に溜め高速で移動する。

忍体術・浮き雲～乱空～…高速で5回の蹴りを与える。魔力との併用により空中での乱舞が可能に。

影の弾…自動追尾の魔力弾。汎用性が高い。多少気が混じっている。

シャドウ・ダガー…漆黒のクナイを大量生産する。多少気が混じっている。

影切り…高速で相手に近づき、すれ違いざまに1撃で相手を沈める。

斬空(ざんくう)…魔力と気を練り合わせたものを脚に乗せ、斬撃にして飛ばす。練りこみの純度が高ければ厚さ１０?ぐらいの鉄板も切れる。

忍体術・空蝉(うつせみ)…攻撃を受けると同時に影分身と入れ替わり、相手の上から強襲するカウンター技。

影分身…気と魔力で作り上げた影の分身。実態があり、任意でコントロールすることもできる。

忍体術・流転(るてん)…相手を高速で回転させ、平衡感覚を奪う技

忍体術・振頭(しんとう)…相手の脳に気を直接たたきこむ技。最大まで手加減すれば脳震盪で済むが、全力だと脳が破裂する。普通の威力でも相

手は死んでしまう。血が出ないので、暗殺にむいている。
ちなみに終夜はこれをマスターしており、脳の特定の部分に気をあて、動きなどを制限したり、魔法を使えなくしたり出来る。

Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ

Ｂ（Ｂｌｕｅ）・Ｓ（Ｓｈａｄｏｗ）・Ｍ（ｍｏｏｎ）モード…シャドウがもともとジュエルシードであることを利用した姿。
ジュエルシードの願いをかなえる力を自身の力として引き出し、操作するもの。
ジュエルシードの力自体が不安定なので持続時間は3分と短い。
名前の由来は使用時の終夜が青白く光っていることから。

他のキャラからの一言
Ｄ「気の使い方教えてくんね？」
Ｋ・Ｔ「なかなか面白い戦い方だな。今度試合してみないか？」
Ｓ・Ｔ「将来が楽しみだよ。今度家で修業しないか？」

デバイス

シャドウ（ＣＶ子安武人）

見た目（人型時）…ＢＡＳＡＲＡの猿飛佐助

終夜の願いがジュエルシードで叶えられ、誕生したデバイス。
もともとジュエルシードに眠っていた意思が具現化したもの。

終夜は魔力に気を練りこんで使うので半分忍術化していて、魔法陣が現れない。
特別なデバイスで一応インテリジェントデバイスの分類に入るが人型になれる。

性格
陽気でお調子者なところがあるが、しまるところではしっかりしめる。
正直、バサラの佐助そのまんま。大地いわく『これ、糞神（あいつ）の差し金じゃね？』だそうです。

特殊機能
Ｊシステム…ジュエルシードの願いをかなえる力を自身の力として引き出し、操作する。
元がジュエルシードのシャドウならではの能力。

イメージ画像（武器本体）
＞ｉ３５９３２―３７３２＜
作：下手な絵ですみません。

その他
日野（ひの）　火燃（かねん）

翠屋ＪＦＣのメンバー、炎系の技を使う。イメージは豪炎寺。

宮之　風助（みやの　ふうすけ）

翠屋ＪＦＣのメンバー、風系の技を使う。イメージは松風天馬。

無風　林道（むふう　りんどう）

翠屋ＪＦＣのメンバー、林の技を使う。

曇天　雷戸（どんてん　らいど）

翠屋ＪＦＣのメンバー、雷系の技を使う。

日月　光（ひづき　こう）

翠屋ＪＦＣのメンバー、天空の使徒の使う技を使う。

日月　闇（ひづき　やみ）

翠屋ＪＦＣのメンバー、魔界軍団Ｚの使う技を使う。

水木　小池（みずき　こいけ）

翠屋ＪＦＣのメンバー、水または氷の技を使う。

山本（やまもと）　岩（がん）

翠屋ＪＦＣのメンバー、岩系の技を使う。

真条（しんじょう）　真（まこと）

翠屋ＪＦＣのメンバー、技は無いがスキルが多い。

前野（まえの）　勇助（ゆうすけ）

翠屋ＪＦＣのメンバー、青いゴットハンドなどを使う。イメージは立向居。

親父

この作品のジョーカーキャラ
大地が『親父』と呼ぶ大地の前世の父親。
大地いわく超絶自信家で実際超強い。
どんくらい強いか？というと、転生者がどれだけ強いスキルを持ってても、それを使わせる前に倒せるらしい。
一応普通の人間。

オリキャラ図鑑？　（１１／２７更新）（後書き）

１１／２７　シャドウイメージ画像追加

第１２話　日常・・・でも俺には平穏がない（泣）（前書き）

最近は時間がなかったんで、名（迷）言コーナーができていなかったけど、今回からふっか～つ！！
それじゃあ・・・いってみよ～！！

『言ったはずだ、オレは格下は相手にしねーんだ。』・・・リボーン（家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！）

第１２話　日常・・・でも俺には平穏がない（泣）

「ねみぃー」

「だからといって学校で寝るな。」

「起こす苦労も考えてよね。」

「善処する」

【いや、やる気無いだろ・・・】

はい、という訳で俺は今学校です。

因みにシャドウもとい猿飛佐助は音楽プレーヤーになって終夜の首にぶら下がってま～す

え？シャドウが佐助って名前になった理由？

それはシャドウが

『シャドウよりもカッコイい名前で呼んでくれね？』

と言ったから俺が付けた

人型はＢＡＳＡＲＡの猿飛佐助にそっくりだからな

「に、しても俺に様々な殺気が向けられてるようだが・・・なぜ？」

・・・死なないから別にいいけど

～昼休み～

いつものメンバーで昼食を取りつつ俺はパソとガイアを繋げてパソを改造・・・等と考えていた

「大地！！」

「・・・うっさいな～何だよアリサ？」

俺がアリサの声に反応するとすずかとなのはが落ち込んだ

【ほー。なのはやすずかが呼びかけても反応しなかったのにアリサには1発で反応したね～】

「・・・まさにバカップル（ボソッ）」

「ん？終夜、今何か言った？」

「何でもない」

「そうか？んで、なんの話だっけ？」

「やっぱり話聞いてなかったのね・・・」

「その出来の悪い息子を見るような目をやめない？」

アリサは少し溜め息をついた

「将来の夢よ。」

「なーる」

「そんで。あんたの夢は?」

「う~ん・・・その前に一度みんなの夢をききたいかな」

「わかったわ」

「じゃあ、俺から順に言うな」

「りょーかい」

終夜がはじめに言うことになった

「俺は忍としての腕を磨いて世界の強者と戦う。」

・・・バトルマニア?

次にすずか

「優しくて強い人のお嫁さん♪」

・・・何で俺を見て赤くなる?

んで、なのは

「お兄ちゃんのお嫁さん!!」

「つまらない冗談だな」

「むぅー冗談じゃないの！！」

はいはい、兄をからかうのはやめようね～

最後にアリサ

「とりあえず大学に入って、科学分野に進む。かな」

「科学か！！お前らしくていいじゃん！」

「そ、そう？」

パシィ

「え！？／／」

「応援するぜ！」

俺は勢いでアリサの両手を握った

「ぇ・・・あ・・・ありがと／／／／／」

アリサは手を握られたのが恥ずかしかったのか頬を赤らめた

「うん。可愛いよお前。何なら俺と結婚する？」

「けけけ！！結婚！？／／／／」

「釣り合わないのは解るけど、お前がいいなら・・・な？」

「ぅ・・・あ・・・ぇる・・・／／／」

「・・・冗談だ。」

「っ～!?大地の馬鹿ぁ!!」

「ははっ!捕まえてみな～」

俺はからかいで怒ったアリサとの追いかけっこが始まった

「バカップル・・・」

「「いいな～羨ましい・・・」」

・・・あいつらは何を言ってんだ?

閑話休題

「悪かったって」

「ふん！！」

少しからかい過ぎたな・・・仕方ない。

俺は前世でこれやられるの大好きだったし、アリサともそれなりに仲良いから平気だろう、きっと

ぎゅっ

「「「！？」」」

【ひゅ～・・・やるねぇ・・・大地の旦那】

【しかし・・・これは少しやり過ぎでは？】

「！！？？／／」

「これで許せ、な？」

俺はアリサを抱き寄せて頭を撫でた

「し、しかたないわね。あ、あ後少しこのままでいたら許してあげ

る／／」

「ハイハイ。わかりましたよ。お嬢さま」

ぎゅぅぅ

「あっ・・・／／」

俺は少しばかし抱き締める力を強くした

「・・・大地のバ～カ・・・／／／／」

「っ！！」

幸せそうな顔しやがって・・・

くそっ・・・可愛いじゃねーか

「なんか2人だけの空間が・・・」

「ブツブツ・・・（黒）」

「ブツブツ・・・（黒）」

「・・・モテる男は辛いな・・・大地・・・」

「大スクープはっけぇぇぇん！！」

カシャッ×5

「ふ、風助！？」

「忍の俺が気配に気付無かった！？」

「そこぉ！？突っ込みそこぉ！？」

「そうだな・・・見出しは『大地×アリサ！まさかの熱愛発覚！？』

かな？」

「ちょっ！なんでそうなるのよ！！」

「そうだ！！何でアリサが俺なんかと付き合う事になってんだ！？」

「馬鹿！！」

「いだっ！！」

何で殴られた！？

「この記事なら新聞の一面を飾れる！！早速文をまとめなくては！！とおぅ！！」

風助は柵を乗り越え屋上から飛び降りた

「！？待てっ！！」

直ぐに柵から見下ろして見ると風助が2階の窓から校舎に入るのが見えた

「くそがぁぁぁぁ！？」

俺も同じ行動を取り、風助を追いかけた

「・・・大地はまだわかるけど風助・・・あいつは人間か？」

「生身で壁蹴って登れるひとに言われたくないと思うけど・・・」

「すずか?それは意外と傷つくぞ・・・」

~しばらくして教室~

「に・・・逃げ切られた・・・」

何だあいつ!?

何が

『新聞記者の執念!見せてやるぜぇぇ!!』

だよ!!

速すぎだろ!!

どんな新聞記者だ!?

「遅かったな」

「・・・」

「どうやら、捕まらなかったみたいだな。」

「へんじがない　ただのしかばねのようだ」

「じゃあまた放課後な。」

もう、今日は寝よう・・・

「寝るな！！」

「いだっ！！」

くそぅ・・・

クスクス

女子。俺とアリサを見て笑うんじゃねー

「ちっ・・・リア充め」

「リア充爆発しろ」

「ＭＯ☆ＧＥ☆ＲＯ」

そして男子。意味の分からない言葉を使うな。

俺のどこがリア充なんだ？

代わりたきゃ代わってやるよ。

喜んでな。

～放課後～

「なのは？すずか？歩きづらいんだけど？」

「お昼の時間の分今ここで相手してもらうの～ね、すずかちゃん♪」

「うん♪」

俺は今右手になのは、左手にすずかが抱きついている

「アリサ～助けて～」

「ふん！！」

「放置？俺泣くよ？」

「あ、そういえば。」

終夜が何かを思い出したような反応をした

「大地？結局お前の夢ってなんなんだ？」

「あ」

「そういえば」

「聞いてなかったね」

４人の視線が俺に向く

「そんなにききたい？」

「「「「うん」」」」

「俺の夢はな・・・」

「夢は・・・」

「ない！」

ズルッという音と共に４人はコケた

「「「「無いの！？」」」」

「無い！」

「大地・・・」

「あんたねぇ・・・」

「だってよー将来を考えるってことは未来を限定するってことだぜ？つまらなさすぎだろ？」

「『未来は無限大』ってな。自分の人生自分で作って過ごしたらつまんねーよ。何が起こるかわからねぇ。だからこそ人生は楽しいんだ。」

「お前らしくていいじゃないか。大地？」

「だろ？」

「・・・考えるのが面倒くさいだけじゃないの？」

ギクゥ!?

「ソ、ソンナコトナイヨー」

「図星ね」

アリサ!何で見抜くんだよ!?

「あんたの考えなんてお見通しよ」

不幸だ・・・

【(大地の旦那・・・なんかまるで妻に隠し事ができない夫みたいになってるんだけど?)】

第１２話　日常・・・でも俺には平穏がない（泣）（後書き）

さて、前回質問みたいなのがあったんでここに一応書いておきますね。

アンケートの期限は詳しくは決めません。
話でプレシアが管理局に捕まるまで、ってことにします。

サイバスターさん、勝手に期限を変えてすみません。

と、いうわけで感想やら質問やらまってま～す。

では
「またな！！」

第１３話　『太陽』と『月』と『金髪』と『闇』（前書き）

すんません！週末になるまで時間がとれなくて・・・

じゃあ！名（迷）言コーナー！！

『いったいどのあたりが『はんせい会』なんだよ！』・・・クロノ（クロノ・トリガー）

さすが主人公！！どっかのＫＹとは書くが違う！！

大「クロノは神作だ！」

ですよね～！！

ちなみに今回はフェイト登場回です！

やっとここまで来た・・・

さて、フェイトにフラグを立てるのは誰だっ！！（今回はまだ立たないけどｗｗ）

第13話　『太陽』と『月』と『金髪』と『闇』

おはよーございまーす！！みんな大好き大地君だよ？

・・・うぇ、きもっ。やっぱやるんじゃなかった・・・

というわけで大地だぞこらァ。今日はすずかの家にお呼ばれされたぜ！！

さて、今はバスの中。メンバーは俺、なのは、恭也、の3人だ。

恭也はすずかの姉、忍さんに会いに行くらしい。

・・・まあ、行くときに美由紀にジト目で見られてたな。

そうそう、終夜も来るぜ？

ふっふっふっ・・・あいつは私服で来るらしい。

今日はあいつに伊達眼鏡をかけさせる！！

ジルウェのコスプレをさせるのだぁぁぁぁ！！

「はーはっはっはー！！」

「バスの中で騒ぐな！！」

「すまそ・・・」

～すずかの家の前～

でっかいな～うん。

ん？その前にいる人って・・・

「遅かったな？」

やっぱり終夜か。
服装は白いズボンに黒のTシャツ、その上に赤いジャケット。
赤い靴に黒い指の出るグローブをはめている。
・・・うん、コスプレさせる必要ない。まんまジルウェです。
ごちそうさまな感じです。

「すまんすまん。なのはの準備が長くてな。」

「ふぇ？私のせい？」

「こら大地、あまりなのはをいじめるなよ？」

「おいっす」

ピンポーン
俺たちがインターホンを押すと中からきれいなメイド服を着た人が
出てきた
やっべ！！本物のメイドじゃん！！イイネ！！なんか！！

ぎゅうぅぅ

「なのは？足踏んでる。」

「気のせいだよ。」

「・・・」

「えっと・・・なのは様に恭也様、大地様と終夜様ですよね？」

「なんか・・・すみません・・・家の兄弟たちが・・・」

「恭也さん、ノエルさん、こいつらはいつものことなんで、気にしなくていいですよ。」

「そ、そうですか・・・では、こちらに。」

俺たちが部屋に着くとすでにそこにはすずかとアリサがいた

「あ！なのはちゃん！それにみんな！！」

「おまたせー」

「なのはちゃん！いらっしゃい！！」

キター！メイドキター！！

「はじめまして、高町大地と申します。」

「なんで急にあらたまるんだよ・・・」

「恭也いらっしゃい。」

「ああ。」

「なんかあっちはあっちで2人だけの世界入ってるし・・・」
「お姉ちゃんと恭也さんはラブラブだからしかたないよ。」
「お茶をご用意いたしましょう。皆様、何がよろしいですか?」
「任せるよ。」
「私も、お任せします。」
「俺は結構です」
「俺も、自分で持ってきているので。」
「かしこまりました。ファリン?」
「はい、了解です。おねー様」
「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから。」
「はい、そちらにお持ちします。」
ノエルさんとファリンさんは礼をして飲み物を取りに行った
「なんでそんな物足りなさそうなんだよ・・・」

「うるへー」

俺たちはそれぞれ席に着いた

「おはよー」

「おはよーさん」

「あんた・・・学校ではよく寝るのに朝は平気なのね・・・」

「いいか?アリサ?学校は寝るためにあるんだ。」

「いや、違うから。」

え?

「何言ってるのこいつ?みたいな顔するな。お前が間違ってる。」

閑話休題

お茶をしつつ話をして結構もり上がった

「よっ、はっ、とっ」

「すごーい!!」

「・・・佐助の忍術見てるだけじゃねーか。」

「まあまあ。楽しんでくれてんだからいいだろ？」

「っと！忘れるとこだった。すずかー！」

「？」

俺はバッグの中から人形を取り出しすずかに渡した。

「ほれ、頼まれたもんだ。」

「ありがとう！！直してくれたんだ！！」

「頼まれたもんだからな。」

「なかなか上手く出来てるじゃないか。」

「俺の特技は裁縫だぜ？（ドヤァ）」

「ドヤ顔はやめとけ。」

俺らが下らない漫才をしていると佐助がふらふらとちかづいてきた

「旦那～後は任せた～」

「？」

「じゃ！」

どうやら忍術の見せるのに疲れたらしい。

「・・・仕方ないな・・・じゃあこいつでも聞くか？」

終夜はポケットからハーモニカを取り出した

「得意なのか？」

「一応音楽は大好きでね。・・・子供のころよく父さんが聞かせてくれたんだ・・・」

終夜は父親のことを思い出したのかさびしそうな目になった

「そうか・・・」

「じゃあ・・・なんにしよ？」

ズルッ！？（こける音）

決まってないのかよ！？

「あーじゃあこれで。」

俺は持っていたメモに楽譜を書いた

俺も音楽は得意だからな。

「これは？」

「『歌う山』俺が前世で好きだったゲームのＢＧＭ」

「わかった。いくぞ。」

終夜は近くの木にもたれかかりハーモニカを吹き始めた

♪~♪~♪~

「きれいな音色・・・」

「もともといい曲だけど・・・ここまできれいに吹けるとはな」

「・・・ふぅこんな感じかな?」

「サイコーだったぜ!!」

「プロみたいだったよ」

「それはよかった。」

キィィィィン

「「「!?」」」

これって・・・ジュエルシード!?

どうやらなのは達は念話でなんか話してるし・・・
あれ?俺って仲間はずれ?
・・・ぐすん。泣かねーよ・・・悔しくなんてねーんだよ・・・

【(大地様!!シャドウから通信が!!)】

どう出ろと!?

【(念じるだけで構いません!!)】

了解!

【(大地の旦那ァ!俺たちは用があるってことで席をはずすから、旦那となのはちゃんは今から逃げるユーノを追いかけるんだ!!)】

ｙｅｓｓｉｒ!!

【(英語?)】

気にすんな!

【(はあ・・・)】

よし!!作戦実行だ!!

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ終夜

「なのは！大地！」

「あ！終夜君！！」

あれ？大地の反応がないが・・・？

【終夜様、それが・・・】

～事情説明～

「はぁ？」

大地自身は魔力を持ってないから結界を張る前にガイアを手放すと結界内に入れない。
んでユーノが結界を張る直前にガイアを落として結界の外に取り残されたってか・・・

「妙なところで抜けてるなーこいつ。」

「あははは・・・」

「仕方ない、ガイアは俺が持っておこう・・・」

【その心配はありません】

ガイアを光が包むとそこにはオールバックの髪型の強面気味の男性が立っていた
やくざのような雰囲気があるが服装からして侍なのか？

「お前もなれたのか？」

「いや、佐助の魔力に充てられたのが原因だろう」

？口調が変わった？

「これが俺の本来の口調さ。デバイスのなら言葉づかいじゃないほうがいいと思ったからな。」

「へえ。っと、じゃあ、急ごうか？」

「「「はい（おう）！！」」」

ズシィィン

『にゃ～』

「え・・・？」

「ふぇ・・・？」

「こ、これは・・・？」

「大きい子猫・・・？」

俺たちの近くに異常な大きさの子猫が立っていた。

「な、なんなんだ？これ・・・？」

【だ、旦那・・・あいつはおそらくジュエルシードの力であの猫の『大きくなりたい』って願いが正しくかなったもんだろ？】

「・・・大きくなるってそういうことじゃないだろ・・・お前らってそこらへんてきとうだよな？」

【細かい作業とか人の意思をくむとか苦手なんだよ・・・まぁ！俺は違うけどな！！】

「そうか。それじゃ、このままでも危ないし、はやく終わらせようか？」

「そ、そうだね。あの大きさじゃすずかちゃんも困るだろうし・・・」

『にゃ～』

「任務・・・巨大化した猫からジュエルシードを回収。
条件・・・猫にはなるべく傷をつけない。
・・・任務受諾、これより任務を遂行する。」

「・・・旦那、それ必要か？」

「現代の忍は個人的な依頼をこなすのが仕事だったからな。つい癖で。まあ、今は俺しか忍はいないから任務なんてなかなかないけどな。」

「へ、へぇ・・・」

「次は状況の確認だ。」

俺は任務対象を見た。

「・・・様子からして攻撃の意思はなし。危険度もそれほど高くない。

それに加え今は結界の中、人に見つかる心配はない。

こちらの戦力は高速戦闘特化１、遠距離狙撃特化１、接近戦闘特化１、防御専門１。

とくに問題は無さそうだな。では、これより任務かいｓ・・・」

俺が任務開始の合図を出そうとした瞬間黄色い魔力弾が任務対象を襲った

「！？」

「何だ！？」

俺たちから少し離れた電柱の上、そいつは立っていた。

・・・俺と同じ綺麗な金色の髪を持つ可愛らしい少女が立っていた。

だが、その綺麗な髪とは対照的に瞳には深い闇が見えた。

そう、大地に会う前の俺のような『闇』が・・・

こういう奴は放っておくと壊れる。

俺は他の誰にも俺と同じ思いなんて味わってほしくない。

俺の『闇の力』はこうゆう『闇』を持つ奴のためにある。

「バルディッシュ、フォトンランサー、連撃。」

俺は金髪の少女が猫に向かい魔力弾を放つ体制になった瞬間、俺は動いた。

ガキィィィン！！

俺は右足で少女の武器を蹴りあげ攻撃を中断させた

「撃たせるわけにはいかないな。」

「!?（速い!!）」

少女はすぐに後退し、俺の間合いから出た。

「なのは!ガイア!ユーノ!封印は任せた!」

「はい!!」

「この人・・・強い・・・」

「任務変更。内容、魔導師の足どめ。対象、魔導師の少女。」

俺は対象をしっかりと視界にとらえ、構えをとった。

・・・この子の持つ『闇』を無くすためにも今は倒す。

大地は闇を照らす『太陽』・・・

なら俺は・・・

「・・・任務開始・・・・!」

俺は太陽のが上がるまで人を導く『月』になる！！

第１３話　『太陽』と『月』と『金髪』と『闇』（後書き）

あーはっはっはっはっ！！何この主人公！！結界内に入れないでやんの！！（爆笑）

大「くそがぁぁぁぁ！！」

終「まあまあ。」

大「放せ！終夜！！こいつだけは粉砕で粉々にするんだ！！」

次回は終夜とフェイトの戦闘回だからおめぇの出番はねぇ！

大「えぇ！？次回も！？」

無印編は大地より終夜が主人公っぽいけどなｗｗ

大「うそん」

まじでｗｗ

大「ｏｒｚ」

と、いうわけで次回をお楽しみに～！

第１４話　あれ？俺は？出て無い！？俺ってホントに主人公なんだよね！？ｂｙ大地

お・れ・のターァァァァン！！

大「何が！？」

というか今回は終夜×フェイトのターァァァァン！！

大「俺のターンは！？」

Ａｓ編に大地×アリサのターァァァァン！！
があるよｗｗ

大「アリサの突っ込みに俺がどこまで耐えられるかでも実験すんの！？やめて！！身が持たない！！」

今回の題名に大地が勝手に出てる件について（笑）

大「話を逸らされた！？」

じゃあ名（迷）言！

『粉砕☆玉砕☆大喝采！！』・・・海馬瀬戸（遊☆戯☆王）

第１４話　あれ？俺は？出て無い！？俺ってホントに主人公なんだよね！？ｂｙ終夜

ｓｉｄｅ終夜

まずは小手調べ・・・

「斬空（ざんくう）！！」

魔力と気を混ぜた物を足に乗せ放つ！

「バルディッシュ！サイズモード！」

『了解』

「アークセイバー！」

ドォォン・・・

俺の飛ばした衝撃波と少女の斬撃が空中で相殺され爆発した

「・・・くる！」

ヒュンヒュンヒュン！！

爆発により発生した煙の中から先ほどの斬撃が飛んできた

「シャドウスロー！！」

俺は影で作られた手裏剣を投げ撃ち落とし・・・

〔忍体術・・・空蝉(うつせみ)！〕

「！？（消えた！？）」

「あまい！」

「きゃぁぁ！？」

ふむ・・・斬撃を囮に本体がその鎌で背後から直接叩きに来たか・・・

「なかなかいい動きだけど、それじゃあ当たらないな。」

「くっ・・・」

「じゃあ、今度はこっちからだ。」

ヒュン！！

ガシィ

俺は疾風(はやて)で少女の前にいき、手を掴んだ

「いつの間に！？」

「同じ高速特化が対決したらどっちが勝つと思う？」

少女は俺が掴んでいた手を振り解こうとしているが俺のほうが力が

強く振りほどけていない

「純粋に速い方が勝つ。」

〔忍体術・・・流転(るてん)！〕

俺は少女に足掛けをしつつ頭を押し、高速で側転させた。

「ふぇ！？」

〔忍体術・・・振頭(しんとう)〕

その直後おでこを指で一突き。

「あ・・・あれ？上手く飛べない？」

「当たり前だよ。脳に気を当てたから」

「え？」

「わからない？説明してもいいけど、その前に・・・ちょっと失礼。よっと」

「え！？／／」

俺は少女の頭と膝に手を回し、抱き上げた。

俗に言うお姫さま抱っこかな？

「このまま飛行魔法で脳に負担かけると障害ができる可能性があるから。恥ずかしいかもしれないけど、我慢しろよ？」

「は、はい・・・／／」

「いい子だ（ニコッ）」

「っ！？キュ～／／」

「あ、あれ？」

いきなり目を回して気絶した？
なんか脳に負担かけたかな？
なんか顔も赤いし・・・

「家に連れて帰って様子見た方がいいか？」

【旦那、それじゃあ気絶した幼女を家に連れ込む犯罪者（ロリコン）になるぜ？】

「・・・潜影（せんえい）使えばみつからないさ。」

【旦那・・・術の使い道が違うって・・・】

「・・・臨機応変にならないと・・・な？」

さて、ジュエルシードの封印も済んだみたいだし、地上に降りるか？

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ金髪の少女

「ここは・・・？」

確か・・・私、金髪の男の人に負けて・・・

「はぅ・・・／／」

そうだ。お・・・お姫さま抱っこされて気絶しちゃったんだ。
うぅー・・・恥ずかしい・・・
思い出すだけで顔が熱くなる・・・

ガチャッ

扉が開くと私と同じくらいの金髪の男の子が入ってきた

「気がついたみたいだね。あ、これ飲む？」

男の子は持っていたカップの一つを私に差し出した。

「あ、ありがとう・・・」

「どう致しまして。」

私は渡された甘い香りの飲み物を飲んだ。
口の中に甘さが広がる・・・

「・・・美味しい」

「お口にあって何より。」

男の子は私の寝ているベッドに腰を下ろした

「俺は影乃終夜、君の名前は?」

「・・・フェイト。フェイト・テスタロッサ。」

「フェイトか、いい名前だね。」

「・・・あなたはあの人の弟なの?」

「あの人?・・・あぁ、あれね。あれは俺自身。デバイスの変身魔法の一種。」

「!?」

この子が!

「何も取って食べる訳じゃないから構えなくていいよ?今は丸腰だ

し。」

そう言って手をひらひらと動かした

「あなたは・・・何が目的？」

「・・・ねえフェイト。せっかく名前を教えたんだから『あなた』じゃなくて『終夜』って呼んでくれない？まぁ影乃でもいいけど。」

「・・・しゅ、終夜？」

「・・・疑問型なのは引っ掛かるけどまぁいいや。」

終夜は姿勢を整えた

「俺の目的は君の心の闇を払うこと。」

「私の・・・心の闇？」

「そ。フェイトぐらいの年頃だと親に関することかな？」

「・・・」

「言いたくないならそれでいい。」

「え？」

「なに？尋問されると思った？そんなことはしないよ。」

終夜はにっこり笑ってー

「俺は君の味方だよ。」

と言った

「・・・」

終夜は私の味方？

敵じゃなくて、味方？

私は母さんの為にジュエルシードを集めてて・・・

終夜達もジュエルシードを集めてるのに・・・

味方？

「君に悩みがあるなら聞くし、何か困った事があるなら解決に協力する。」

「俺、影乃終夜は君、フェイト・テスタロッサの味方だよ。」

終夜はにっこりと笑ってこちらを見ている

何故だかこの人の笑顔を見てると心の底が暖かくなる。

『安心する』

何故だかそう思った。

「今日はもう遅いし、家に泊まっていいよ。」

「え・・・でも終夜の家族に悪いんじゃあ・・・」

終夜は「あぁ、そのこと?」と言うと寂しそうな笑いを浮かべた

「俺、両親3年前に死んだんだ。だから1人暮らし」

「あっ・・・その・・・ごめんなさい・・・」

「気にしてない。夕飯持ってくるから、ちょっと待ってて」

終夜は部屋をでた。

「終夜は・・・両親、居ないんだ・・・」

私には母さんもアルフもいる。
でも終夜は1人。
それでも終夜は力強く生きている・・・
私は・・・どうだろう?
私は・・・何がしたいんだろう?

「私は・・・寂しいのかな?」

私が母さんの言うことを聞くのは・・・
母さんに誉められたいって思うのは・・・
寂しいからなのかな・・・?

ガチャッ

「はい、夕飯」

「ありがとう」

終夜の持ってきたお盆の上にはご飯、味噌汁、豚の生姜焼き、キャベツの千切りが乗っていた
私はそれを受け取り、食べ始めた

「俺が作ったんだけど・・・どうかな?」

「凄く・・・美味しい」

「それは良かった。」

私が夕飯を食べてる間、終夜はにっこり笑っていた

「ご馳走さま。」

「お粗末様でした。っと、そうだ。風呂なんだけど・・・」

「？」

「入ったあとも同じ服ってのもなんか・・・さ。だからいま着てる服を洗濯しとこうと思うんだけど・・・寝るときの服、どうする？」

「私何時もワイシャツ1枚で寝てるからワイシャツでいいよ。」

「・・・わかった。風呂場にタオルと一緒に置いとく。下着は？」

「あ・・・」

「ないの？」

「う、うん・・・」

さ、流石に余所の家で下着なしは・・・

「・・・従姉妹のなら女の子用の下着一応あることはあるんだけど・・・使う？」

「うん、無いよりはましだから。」

「わかった、洗面所に置いとくな。」

終夜は風呂場の場所を言うと、皿洗いを始めた

私は着ていた服を脱ぎ、風呂に入った

「・・・なんか『家族』みたいだな。」

私はそう言って自分の頬が熱くなるのを感じた

でも、悪い気はしなかった。

「また来たいな・・・今度はアルフと母さんも一緒に・・・」

私は体を洗い終え風呂から上がり部屋に戻る途中・・・

「終夜？」

「・・・何だ、フェイトか・・・」

リビングで終夜が巻物の前で暗い顔をしていた

「どうしたの？」

「・・・フェイトには話しておくべきだな・・・」

終夜は自分の両親の事、忍の事、闇の力の事・・・

終夜自身の『闇』について話してくれた

「・・・これが俺の過去さ・・・さあもう寝よう」

「終夜は・・・寂しくないの？父さんも、母さんもいないのに、寂しくないの？」

「寂しいさ。でも、止まってなんかいられない。俺は決めたんだ。」

「太陽の上がるまで、夜を照らす月になる。」

「・・・／／」

振り返った終夜の顔は哀愁が漂う大人な雰囲気があり、とても格好良かった

「・・・お休み。」

終夜は自分の部屋にもどろうとした
その背中には何か、寂しさがあって・・・

ギュッ

「フェイト？」

私は終夜の手を捕まえていた

「え？あれ？私、何で・・・？」

「・・・フェイト、今日一緒に寝ないか？」

「え？べ、別にいいけど・・・急にどうしたの？」

「1人で寝るのが寂しいだけさ。」

「・・・」

「先に行っててくれ」

「うん、わかった。」

私は部屋に向かった

「・・・ありがとうな」

・その日、私達はお互の心の隙間を埋め合うように寄り添って寝た・・

第１４話　あれ？俺は？出て無い！？俺ってホントに主人公なんだよね！？ｂｙ大

明後日から修学旅行か～めんどい。

大「厳密には日本文化体験て名前だけどな」

ああ～タッグフォース６進めなきゃ～

大「続きを書けよ・・・」

りょーかーい

感想やらなんやらお待ちしてます。

ガンガン書いちゃってください！

じゃあまた来週。

「「またな！！」」

第１５話　大地とアリサの憂鬱？（前書き）

ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ。

気が付いたら書いていたＺＥ☆

なぜだ！？なぜなのだぁぁぁ！？

名（迷）言コーナー

『希望はだれが持っても構わない。だが！結果は同じなのだ！！』

…ザキラ（デュエルマスターズ）

第１５話　大地とアリサの憂鬱？

「ちくしょーー！！」

「ちょっ待て！！うわぁぁぁ！？」

ドコォォン！！

ただいま俺！絶賛ぶち切れ中だぞぉ！！

くそっまた避けられた！！

「逃げるな兄さん！！叩き斬れない！！」

「落ち着け大地！！冗談になってない！！」

「死にさらせぇ～！！」

「ギャァァァ・・・」

・・・スッキリ。

「・・・大地。朝から何をしてたんだ?」

朝の食卓で父さんがさっきの一件について聞いてきた

「イヤだな~ただちょっと悩み（ストレス）が有ったから兄さんに試合（八つ当たり）をしただけですよ。」

「・・・（口から魂）」

まぁ、確かに兄さんはぼろ雑巾みたいになってるけども。

「そ・・・そうか!!なら仕方ないな!!」

あれ?何でみんな震えてるのカナ?

「大地君・・・怖い。」

「美由紀姉さん?何か言いました?（ニコォ）」

「ヒィィィ!?」

うーん・・・何が怖い?

俺の顔か?

まぁ、いいか。

俺はそのまま食卓の上の朝食を食べた。

しばらくして朝食を食べ終わり、鞄をもってバスに乗り込んだ

「おはよーさん」

「うん。おはよう。」

一番後ろの座席にはすずかと・・・あれ？

「すずか、アリサは？」

「アリサちゃんは今日は風邪ひいてお休みみたい」

「まじ！やりぃ！！今日は学校で爆睡出来る！！」

アリサには悪いが俺は今日を満喫する！！

「（チャンス！！）」

後ろでなのはがガッツポーズしてるが、まあ、気にしない。

「お兄ちゃ～ん！！」

「ゴハァ！？」

なんか油断してたらなのはがいきなり背中にタックルして来やがった

「何すんだ！？」

「むふふ～（スリスリ）」

・・・アリサが居なくても俺の平穏はないのか？

なのははこの日の大地をこう語った

「何時もと違って元気が無くて、まるで魂が抜けたみたいでした。」

、と

具体的な様子をお見せしよう

体育の授業

「大地！危ない！」

（ぼけー）

ドゴッ！（サッカーボール顔面直撃）

「大地お兄ちゃん！？」

（ぼけー）

「・・・大地お兄ちゃん？」

弁当の時

（ぼけー）

「大地お兄ちゃん？そのお茶どうするつもりなの？」

ビチャビチャ

「ちょっ・・・大地君！？何でお弁当にかけるの！？」

パクッ

「・・・マズゥ！！ってお茶ぁ！？一体誰が！？」

「「・・・」」

数学の授業

（ぼけー）

「大地君、この問題わかる？」

「ラッキーダーツ－ヘブンズゲート－ロマネスク－ロマネスク－ドラグハリケーンエナジー－ロマネスク－ロマネスク・・・・・・」

「ちょっと！？大地君！？大丈夫！？」

「強靭☆無敵☆最強ォォォォ！！」

「誰か！大地君を保健室に！！」

・・・果てしない狂いっぷりだ。

さあ、この小説を読んでいる人なら理由の予測がすんだだろう。

「・・・ダメだ。アリサがいないと如何せん調子が狂う。」

大地は軽くアリサ依存体質になっていたのだ。

・・・本人は自覚無いようだが。

「はぁ、あいつがいないとゲームもつまらないわね・・・」

・・・どうやら、アリサも大地依存体質気味らしい。

「よし、早退して会いに行ってみるか。」

アリサのために凄い決意だなおい

「・・・あいつなんかがお見舞いに来るわけ無いわよね・・・」

・・・こっちはこっちでお見舞いを期待しているようだ。

と、言うわけで。

「やってきましたバニンクス家。」

（わざわざあいつのとこに行くのはしゃくに障るが・・・気になってしかたない。）

（・・・アリサの事が気になって仕方ない・・・？俺が？）

「ははっ・・・まさか、んなこと有ってたまるか。」

（・・・くそっ、今、多分顔が赤いな）

「俺はこの世界のイレギュラー。恋だの何だのは、厳禁だ。」

（さて、お見舞いしますか。）

大地はバニンクス家の呼び鈴を鳴らした

『どちら様ですか？』

「アリサの友達の高町大地です。アリサの見舞いに来ました。」

『！？・・・そうですか。少々、お待ち下さい』

（・・・俺が来たことに驚いた？）

しばらくし、バニンクス家の扉が開き、中からいいかんじに歳を取った執事が出てきた

「初めまして。バニンクス家に仕えております、執事の鮫島で御座います。」

「此方こそ初めまして。」

お互いに挨拶をすると鮫島さんの案内に従い、アリサの部屋に向かった。

「・・・お嬢様は何時もあなたの事を楽しそうに話しております。」

「アリサが？・・・何時も俺に突っかかってくるのに？」

「ええ、あなたと一緒に居れる事を心から楽しんで居るようです。」

「・・・信じらんないな・・・」

「お嬢様は素直になるのが苦手な様なので。」

鮫島さんはにっこりと笑い言った

「・・・」

「つきました。」

鮫島さんは扉のノックした

すると、扉の向こうからアリサの声が聞こえた

「どうしたの？」

「お嬢様に会いたいという人をお連れしました。」

「今はそんな気分じゃないの。帰ってもらって」

「しかし・・・」

「鮫島さん。」

大地は鮫島さんの前に立ち、声を遮った。

「・・・随分元気なみたいだな?学校はズル休みか?」

「!?その声・・・大地なの!?」

「心配して損したぜ。じゃ、帰るな。」

大地は扉の前から去ろうとした時、扉が開き、アリサが出てきた

「ちょっ!ちょっと待ちなさいよ!!」

「んだよ?そんな気分じゃ無いんだろ?」

「い・・・今変わったの!!」

「そうかい。じゃ。」

「待ちなさいってば!!」

「それが人に物頼む態度かな?」

「・・・ま、待って下さい。」

「お?意外に素直だな。いい子だ。」

撫で撫で

「撫でないで!」

「わりぃわりぃ（笑）」

「まったく・・・」

「それでは、邪魔者は去るとしましょう。それでは、どうぞお二人でごゆっくり。」

近くで様子を見ていた鮫島さんは一礼すると去って行った

「とりあえず部屋に入ろうぜ?」

「そうね。」

パタン

2人は部屋に入り扉をしめた

「・・・意外に女の子らしい部屋だな」

「あんたねぇ・・・私は女の子よ」

「そういやそうだったな～」

「聞いてんの!?」

大地は一通り部屋を見て、何かを見つけた

「ん?んだこりゃ?」

「!?ダメ～～!!」

アリサは大地が見つけた物を横からかっさらった

「・・・何すんだ。気になるだろ?」

「これは秘密なの!!」

「ほほぅ・・・秘密と言われると余計に気になる・・・」

「な・・・何をする気?」

大地は両手をワキワキさせながらじりじりとアリサに近寄った

「お前の全身に尋問(くすぐり)」

「セクハラじゃない!!」

「セクハラじゃない。尋問(くすぐり)です（笑）」↑確信犯

「くっ・・・」

「尋問(くすぐり)されたくなければそれを渡せ。（ニヤニヤ）」

「それはイヤ！」

「ならば仕方ない・・・」

大地がじりじりとアリサに近寄り、アリサも少しずつ後ずさりする。

が、しかし

「キャッ！？」

丁度後ろはベッドだったため、ベッドに仰向けに倒れる結果となった

「・・・自らベッドに倒れるとは・・・尋問（くすぐり）を楽しみにでもしているのか？」

「んなわけないでしょ！？」

「じゃ、お邪魔しまーす」

「ちょっ！キャー・・・」

～ここから先は皆さんのご想像におまかせします～

一部音声

「ここか！？ここなのかぁ！？」

「そ、そほはらめぇ！！／／／」

～しばらくして～

「満足。」

「ハァハァ・・・い、息が・・・／／」

「にしても、意外にすぐ呂律が回らなくなったな？いささか手応えがなかったぞ？」

「あ・・・あんたが上手すぎるのよ・・・／／」

「・・・２人とも何をなさっておられたのですか？」

いつの間にか鮫島さんが扉の前に立っていた

「少々じゃれて遊んでました。」

「・・・一応そうなるわね。」

「さ、左様で御座いますか・・・」

はい、ここらでいかがわしい妄想をした人は、あとでマックのスマイルを最寄りのマックで１００個注文しなさい。

「大地さま、旦那様がお呼びで御座います。」

「アリサの父さんが？」

大地はベッドから降りた。

「んじゃ今行きます。」

「・・・大地。」

「何を心配してんだか。」

「・・・」

「はいはい。わかってますよ。俺だってお前といるのは楽しいからな。」

2人は少しの間見つめあっていた

「大地さま、そろそろ。」

「わかりました。んじゃ行ってくる。つっても、戦場にいくわけじゃないけどな。」

「行ってらっしゃい。」

鮫島さんと大地は部屋から出て、アリサの父親の本に向かった

「旦那様、大地さまをお連れしました」

「入れ」

「失礼します。」

その部屋の奥に一人の男が座っていた

「君が・・・高町大地君かね？」

「はい」

「君の事はアリサから良く聞いているよ。」

「・・・」

「そんなに警戒しなくても構わない。ただ、少しの質問に答えて欲しい。」

「わかった」

男は手をテーブルに置き、指を組んだ

「得意な事と苦手な事は？」

「得意なのは技術数理科学・・・つーかパソコンと数学。苦手なのは勉強だ。」

「そうか・・・では、アリサの事はどう思っている？」

「うーん・・・大切な人、であることは間違いないんだろうけど・・・よくわからねえな。」

「そうか。十分だ。次に、君の夢は？」

「ない。俺はなにがおこるかわからない人生を楽しみたい、だから自分で未来を決めるような事はしない。」

「では、最後。アリサか１００人の民間人、どちらかしか救えないなら、どちらを救う？」

「・・・どちらも救う。」

「・・・話は聞いていたかい？」

「もちろん。だからこそ、両方助ける。」

「何が何でも全部助ける。」

「ふっ・・・ははははは!面白いな、君は。」

男は急に笑い出した

「そうか。両方助けるか!!」

男はしばらくわらっていた。

「・・・やばっ!ごめんなさい、用事でもうそろそろ帰ります!それじゃ、お邪魔しました!」

大地は急いで部屋を出て行った

「・・・鮫島、彼のことどうおもう?」

「とても面白い少年です。将来が楽しみですな。」

「全くだ。案外早く孫の顔が見れるかもしれんな。」

「ですな。」

「・・・鮫島、彼をバニンクス家に迎える用意だ。」

「かしこまりました。」

男は椅子にもたれかかった

「アリサの事を頼んだぞ。大地君・・・」

帰り道

「あ、終夜」

「大地か。今、なのはがお前を探してたぞ？」

「げー・・・面倒だな・・・」

「全く・・・まあ、早く家に帰れよ？」

「オッス。じゃあな～」

「賑やかなやつだな・・・」

第１５話　大地とアリサの憂鬱？（後書き）

くそがぁ！？この年で親に許可だとぅ！？

大「なんのことだ？」

リア充滅べぇぇぇ！！

大「ちょっ！！あぶなっ！？」

第１６話　家族旅行。終夜視点だよ？（前書き）

名（迷）言コーナー

『俺の遊びは半分じゃねえ！全部だ！！』・・・明石タギル（デジモンクロスウォーズ）

・・・ああ、書くことがない・・・

第１６話　家族旅行。終夜視点だよ？

ｓｉｄｅ終夜

今俺は森の中を駆け抜けている
時速は・・・４５？／時ぐらいかな？
隣には高町家の車が見える
え？状況が飲み込めない？
仕方ないな、少し時間を遡ってみようか？

～２日程前～

「・・・家族旅行？」

ガッ

「そ、今週末にね。アリサ達も来るぜ？」

バシィ

「でも、なんで俺に話すんだ？」

ドシュ
ガィン

「?来るんだろ一緒に」

シタタタタタ

「大地、話が飛んでるぞ・・・詰まり俺をその旅行に誘いに来たってことだな?」

ビュッ

キィン

「そゆこと〜」

ゴゥッ

「わかった、行くよ。」

ドギャーン

「おう、待ってるぜ?」

シタッ

「・・・だけどな」

シュバッ

「?」

ドォォン

「気の使い方の稽古中に言わなくても良くないか！？」

「その発想は無かった。」

「今気付いたのか！？」

～回想終了～

ってなわけ。

え？走ってる理由？

単純に定員オーバーだよ。

「おほぉ！気って慣れるとヤバいおもろい！！」

「・・・お前はまだ気の細かい部分は未熟だからあまり調子に乗るなよ？」

「了解ぃ～」

気っていうのは個人差はあれど、人には必ずある。

魔力とかとは別物っぽい。

大地が俺に気の使い方を教わりたいと言ったから、教えた。

・・・はっきりいっておかしい。

気の量が尋常じゃない。

ドラ○ンボールのスーパーベジットの５０倍程だろう。

かめ○め波も打てると思ったりするよ、本当に・・・

さて、話を戻そう。

「着いたかな？」

やっと宿に着いたか・・・

「うおー！！使い足りねー！！」

「・・・かめ○め波でもしてみたら？」

「それだ！」

冗談何だけどな・・・

「か～」

あれ？本気？

「め～」

気が高まってく・・・

「は～」

・・・これ、やばくね？

「め～」

ちょっ！なんていう気の量！？

「波ッ！！」

ドギャァァァァ・・・

「！？」

蒼い光の柱が大地の手から出て、天を貫いた。

「撃てた！ヤッホーい！！」

・・・規格外過ぎる
いつか地球が壊れるかもな・・・

「大地。気の修行、しっかりやるぞ」

「おう！」

～風呂前～

「大地様、如何なされました？」

「旦那もだ、何を呆気に取られてるんだ？」

今回の旅行はガイアと佐助も人型で参加している。

・・・のだが。

「「何故戦闘用の服!?」」

佐助は忍装束だし、ガイアは腰に刀差してるし!

「これ以外の服は無いんだぜ?」

「嘘だな。買い物の時は普通の服だった。」

「ソウダッケナ~?」

はぁ・・・まぁいいか。

「お風呂楽しみだね、大地君?」

「すずか?なのは?なんで俺の腕を掴んでるんだ?」

大地はすずか達に引きずられて女風呂に入る羽目になりそうだな。

「大地、先行くぞ?」

「え!?嘘!ちょっ!待てよ!!」

「大地君はこっち。」

「HA☆NA☆SE!!」

・・・頑張れ大地

「大地、なのはには触るなよ！」

「恭也さん。落ち着いて下さい。いいから風呂に入りましょう？」

「見捨てるな～！」

～数分後～

俺と大地は体を洗っていた

「死・・・死ぬかと思った・・・（社会的に）」

因みにユーノは俺が洗っている

「きゅー」

「良かったな。変わり身の術使えて。」

「きゅーきゅー」

「ユーノはなのは達と入りたかったのかな？」

「きゅ！？きゅ！きゅきゅー！！（ちがうよ！！）」

あ、洗い終わった

「そうか？」

「きゅー（ほっ）」

「じゃあ転送してあげよう。」

「きゅきゅ！？（何故！？）」

理由？面白そうだから

「はい、転送。」

「きゅーー！！」

良し、成功。

「・・・便利だよな。魔法って。」

「大地は使えないんだったよな？」

「いーなー俺も使いてー！」

「諦めなよ？」

「わかってますよ。それはそうとお前随分細くて白い体だな？」

「余分な筋肉は重いだけだからね。それと、白いのは母さんからの遺伝。」

「遺伝ねぇ・・・」

「さっさと体洗って風呂に入ろう？風邪ひくぞ」

「そうだな」

風呂からあがったあと、子供組は宿を探検する事になった。

アリサの強引さには呆れるよ・・・

「アリサ～」

「はい、水。」

「ありがとー」

最近、大地とアリサが阿吽の呼吸を習得したらしい

大地がアリサを呼ぶだけでアリサは大地の要求がわかっている

因みにアリサの定位置は大地の隣だ

・・・早退した時何が有ったんだ？

そうこうしていると前から女の人が歩いてきた

「はぁ～い失礼？」

「おばさんだれ？」

「お、おば・・・！？」

「大地！失礼だろ！」

「すまそ」

ったく・・・

「すみません。こいつ馬鹿でして・・・」

「馬鹿?誉め言葉じゃないか!」

「黙ってろ!!」

「ぐぬぅ・・・外せぬ。アリサ～慰めて～」

「はいはい。」

「・・・」

「気にしないで下さい。で、何か俺達に用ですか?」

女性は一瞬はっとした

「いや～うちの子が世話になったらしいね?そん時のお礼を言おうとね?」

・・・フェイトの仲間だな。

揺さぶってみるか?

『無理に隠すな。魔力でバレバレだ。』

『!?』

『いきなり念話ですまないな。フェイトは来てるのか？』

『ああ、来てるよ。』

『なら、会うことになるだろう。じゃあな？』

「それじゃ、またいつか」

・・・フェイトは今どうしてるんだろうな？

～夕飯～

あの後、いろいろ探検したけど特にこれといったものはなかった。
そりゃ、ただの宿なんだから当たり前か。

「ひゃっはー！！」

「静かに食え！！」

「うっはーい！！テンションの上昇率がおかしーや！！」

「大地様！！落ち着いてください！！」

「アリサ～！今日は一緒の布団で寝よーぜー！！」

「な！ななな、なんでそうなるのよ！！／／／」

「いいじゃーん、な！」

「ちょっ抱きつかないでよ！！」

・・・見てられん。

「ふっ！！」

びしぃ

「阿部氏！？」

「・・・まったく。はしゃぎすぎて寝ちゃったか？」

（（（（（（（（（（気絶させたぁぁぁ！！））））））））））

「すみません。少し大地に一説教（打ち首獄門）しときます。」

「しゅ、終夜くん？」

「すこし、口出しすんな。」（どすの利いた声）

（（（（（（（（（（怖ぇぇぇぇぇ！！））））））））））

夜

「終夜！俺、気の使い方の修行行ってくる！」

「もう勝手にしろ・・・」

「ガイア！佐助！ついて来い！」

「承知！」

「了解ぃ。」

・・・いったか？

「つーかおい！佐助は俺のデバイスだろ！？」

・・・はぁ、全く・・・

「・・・？魔力反応か？」

しかし・・・デバイス無いし・・・

まぁ、なのはやフェイトがいるからジュエルシードの心配は無い。

「ねるか。」

フェイトには又いつか会えるよな？

おまけ

大「俺！スーパーサイヤ人みたいなのになれるかな！？」

佐「それは無理。」

大「うぉぉぉおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ボォウ！！

コォォォォォ

大地の髪が黄金に輝いている！

大「・・・できた？」

佐「うそん」

ガ「ただ、気を大きく解放しただけでは？」

てろれろれ～♪

大地はスーパー転生者に覚醒した！

大「名前にひねりがねぇ！！」

第１６話　家族旅行。終夜視点だよ？（後書き）

前書きにも書いたけど書くことがない。

う～ん。

さて、今度ノリでＶｉＶｉｄの嘘予告でもしようかな？

第17話　再対決!!大地対終夜!!（前書き）

はい。少し更新送れました。

すんません。

というわけで名（迷）言コーナー

『謀ってなどいないさ。
あの地球に書いた紙芝居こそ。
スパイでも将軍でも連蓬でもない・・・
エリザベスの最初で最後の真実のプラカードだ!!』・・・エリザベス（銀魂）

大「ちょ・・・ｗｗ声アムロ・・・ｗｗｗ」

確かにアニメはやばかった。うん。

第17話　再対決!!大地対終夜!!

「なかなか見つからないな・・・」

「この辺りのはず何だけど・・・」

「にゃははは・・・もうすぐ帰らなきゃいけないのにね・・・」

「まぁ、そしたら俺が残って探すよ。」

「わりぃな」

よっ!俺、高町大地。
絶賛捜索中だ!

『すみませんガイアさん、お役に立てないで・・・私には探知機能が付いてないので・・・』

【気にする事は無い。俺や猿飛ではジュエルシードを封印出来ない。詰まり、お前は居なきゃならないんだ。捜索と戦闘は任せろ、だが、封印は頼んだぞ。】

『・・・はい!!』

【・・・レイちゃん?俺様もいるんだけどな~?】

デバイス達のリーダーはガイアみたいだな?

「佐助？レイちゃんって誰なんだ？」

あ、確かに。

【レイジング・ハートちゃんのニックネームだぜ。】

『猿が、気軽に勝手に呼ぶな。』

【酷い！】

【まあしかしいい呼び方だな。俺もそう呼んでいいか？】

『ま、まぁガイアさんなら・・・』

あるぇ～？心なしかレイハが赤くなってる気がすんな？

【ありがとうな、レイ。】

『っ～～～！！』

あれ？レイハってこんなに赤いっけ？

【俺のことも呼び捨てで構わない】

『し、しかし・・・』

【構わない。】

『じゃ・・・じゃあ・・・・・・・・・ガ・・・ガイア・・・』

【何だ？レイ？】

『にゃ！？』

ポヒュン

【レイ！？】

「ありゃ？」

何か気の抜けるような音がして、レイジングハートが以上に赤くなった

「レ、レイジングハート！？大丈夫！？」

『だ・・・大丈夫です・・・』

（大地とガイア。なのはとレイジングハート・・・持ち主が持ち主なら相棒も相棒・・・か）

【もしかして俺様、空気？】

「大丈夫。僕の方が空気だから。」

・・・頑張れ、ユーノ。

閑話休題

あれからしばらく探してみたがジュエルシードは見つからなかった。

「流石に今日は帰るか？」

「そうだね・・・」

「後は任せろ。探して・・・」

「「「！？」」」

「え！？なに？どうしたのみんな！？」

「近くに魔力反応・・・！？」↑魔力ある人

「こんな街中で強制発動！？」↑同じく魔力ある人

「にゃ！？そそんなの危険過ぎるよ！！」↑同前

「エ？ナニソレ？俺気づかなかったよ？」↑魔力無い

【・・・大地の旦那、諦めなよ・・・】

「みんなひどいや！！」

渡る世間は鬼ばかりだよ！！

もういいよ!!いじけてやる!!

そうこうしている内にユーノが結界をはった

「いくぞ!大・・・ち?」

「みんな頑張って~俺、どうせ役たたずだから。」

「(暗っ!?)い、いや、この中で一番強いのお前だろ!?役立たずなんかじゃあ無いって!!」

今俺は猛烈に落ち込んでいる。
どのくらいかというと・・・

道の端にいき、膝を抱えて座り込み、地面にのの字を書くぐらいだ

「俺は魔力無いしさ・・・空飛べないしさ・・・魔力も感じられないしさ・・・ガイアが居ないと結界の
中にも入れないしさ・・・それに(ブツブツ)」

「・・・はぁ。んで?行くの?行かないの?」

「・・・・・・・・・・・・・行く」

(まるで子供だよ・・・)

「ユーノ?大地は子供だぞ?」

「え!?終夜!?」

「考えを読んだだけだよ。そこまで驚くことかな?」

「・・・(もう何でもアリなのかな・・・)」

・・・あ、ツッコミがいるのにボケし忘れた。

sideなのは

お兄ちゃん達がぐずぐずしている間に私は暴走してるジュエルシードの封印をしたの!

でも・・・

「あの時の・・・」

「・・・今日も終夜は居ないんだ?」

「・・・ねえ、お話・・・聞かせてくれないかな?」

「悪いけど・・・それは出来ない・・・ジュエルシードは渡してもらいます。」

むぅ・・・なかなか頑固なの

「だったら!倒してでもお話を聞くの!」

私はレイジングハートを構え、魔力弾を作った

『ディバインシューター』

「シュート！！」

「バルディッシュ、フォトンランサー」

私の魔力弾をあの子の魔力弾が相殺した

「行くよ！！レイジングハート！！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「・・・終夜？なんでお前はそっち側に居るんだ？」

「なんでって、俺がフェイトの味方だからだけど。」

俺と終夜の間に沈黙が流れる

・・・どうやら彼奴は俺の敵になるみたいだな

「あ・・・あんた、一体なんのつもりだい！？」

「全くだ。」

「俺は大地の味方だけど、フェイトの味方でもある。俺は心に闇のあるものの味方になり、より闇の強い者の味方になる。」

？？？

「何がなんだかさっぱり分からん。」

「要するに・・・今は俺はお前の敵。って事だ。」

ほうほう。

つまり・・・・・・・・・

「つまり・・・お前と戦えばいいんだな？」

俺は戦闘体制を取った

「え！？ちょっ！！大地！？」

「大丈夫。終夜が言ったんだ。もとより倒すだけさ？」

「疑問型！？本当に大丈夫なの！？」

「大丈夫さ」

「多分」

「多分かよ！！」

ｓｉｄｅ三人称

「アルフさんはユーノを取り押さえて下さい。大地は俺がやります。」

アルフは終夜の発言に怪訝な顔をした

「・・・敵のあんたを信じろって言うのかい？」

「ええ、信じて下さい。さもないと、大地に瞬殺されますよ？」

「それってどういう・・・？」

「先手必勝ぉぉぉぉぉ！！」

〔ダッシュパンチ！！〕

ドゴォォォン！！

「!?（速い!?）」

「くっ・・・アルフさん!速く下がって!!」

「わ・・・わかったよ!!」

（・・・止められたか）

終夜は不敵な笑みを漏らしながら受け止めた大地を弾き返した

「っと」

大地は空中で体勢を立て直し、器用に着地した

「会話中に攻撃って・・・失礼だぞ?」

「いいだろ?手加減でガイア使わねーでやるよ。ガイア!バリアジャケットだけ展開!んで、あの女の相手して来い!」

『御意』

大地はバリアジャケットを展開し、ガイアを人型にした

「・・・背中は任せたぜ」

「このガイア!大地様の背中には傷一つつけさせはしません!」

終夜は少しため息を吐いた

「ガイア無し。か。随分舐められたものだな?」

『旦那！準備は出来てるぜ！！』

「シャドウ・・・ｓｅｔ・ｕｐ」

終夜はバリアジャケットを展開し、印を結んだ

「魔力拡散・・・」

「終夜、おまえにすげぇもん見せてやろうか？」

「術式展開・・・」

「なに？無視？」

「魔力素整理・・・」

「おーい？終夜ー？」

「空間把握・・・

魔力充填・・・」

「・・・・・・・・・（ぶちっ）」

「話聞けよ！！」

〔ダッシュパンチ！！〕

大地は地面を強く蹴り、終夜に拳を繰り出した

が、

スカッ

「あら！？」

大地の繰り出した拳は終夜をすり抜け、終夜の姿が消えた

「え！？どこ行った！？」

大地は辺りを見回すが姿は見えない

『影は掴めない・・・』

「声！？くっそ～隠れてないで出て来いよ！！」

『・・・いや、これも立派な戦法だからね？』

「ひきょーだ！ひきょー！！」

『・・・』

「そっちがその気なら・・・」

「悪いけど、隙だらけだぞ」

「後ろ!?」

ガキィン

「流石。」

「しゃらくせぇ!!」

ドウッ

終夜の奇襲を気で作った盾で防御し、気の波動で攻撃した

「って!また消えた!!」

『この技は高等技能の《我ガ身影ノ如ク》。闇夜に紛れ、奇襲する技だ。本来ならこんな大通りじゃ無理だけど、空間に俺の魔力の充満させて、俺の位置をわからなくしてるのさ。』

「空間に自分の魔力を充満!?(そんな事・・・尋常じゃない魔力量と魔力を操作するだけの強靭な精神が必要なはずだ・・・でも終夜の魔力量はそんなに大きくないし・・・)」

『魔力って便利だな?』

（これは・・・便利だから出来るなんて簡単なレベルじゃない。終夜は一体何者なんだ・・・）

ユーノは終夜がサラッとやってのけた芸当に驚きを隠せないでいた

だが、この馬鹿は更にその上を行った

「・・・面倒だ、まとめてぶっ飛ばす。」

『「!?」』

「ハァアアアアアア!!」

『これは・・・!?気が膨れ上がってる!!』

「ダァ!!」

ゴワァッ!!

「だ・・・大地の髪が・・・金髪に・・・」

『おいおい・・・どこの戦闘民族だよ・・・』

「こいつが俺のスーパーモードだ!」

『スーパーモードって・・・スーパーサ○ヤ人のパクリ・・・』

「この姿を舐めるなよ・・・・！！こいつを食らえ！！」

大地は気を一気に放出し、爆風を起こして辺り一面を吹き飛ばした

「超☆爆☆波！！」

「粉砕☆玉砕☆大喝采！！」

「相変わらずの規格外だな・・・？」

「これに耐えたお前もな？」

だが、瓦礫の上に無傷の終夜が立っていた

がらっ

「し・・・死ぬかと思った・・・」

「お、ユーノ。無事だったか？」

瓦礫の中からユーノが顔をだした

「誰かさんが僕の防御魔法にかめはめ波をぶつけて特訓してたから

ね！！（怒）」

「ついにユーノの防御魔法も規格外になったか・・・」↑忍術を使って影に潜れたりする人

「人を人外みたいに呼ぶの止めない？」↑ビルを吹き飛ばす程の爆風に耐えきったフェレット

「そーだそーだ！」↑ビルを吹き飛ばす程の爆風を起こせる人

・・・お前ら全員常識外れだ。

終夜はニヤリと笑った

「さて、大地？お前はスーパーモードっていう隠し玉を見せた。」

「急になんだ？」

「俺の隠し玉も見せてやるよ！！」

『旦那！準備は出来てるぜ！！』

「いくぞ！Ｊシステム起動！」

終夜の声に反応するように終夜の籠手に付いた宝石が光を放ち、その光は終夜の体全体に広がった

「どう？ジュエルシードの願いを叶える力を魔力として引き出してるんだけど。ああ、そうそう。この姿は動体視力が底上げされるから、遠距離技は全部避けるよ？」

「オルタナティブモードかよ・・・」

「しかも・・・！」

〔忍体術・疾風！！〕

ビュン

「ぐぁっ！？」

終夜のボディブローが大地に直撃した

「身体能力も上がるから、接近の高速戦闘も出来る。ただ、３分しか持たないけど。」

「上等・・・やってやるよ！！」

「そう来なくちゃ！」

「「ハァァァァ！！」」

二人は同時にバックステップをして距離をとり、相手に突貫した

「うぉおりゃ！！」

「くっ・・・！」

一瞬の均衡直後、大地が終夜を押し返した

「（いくら身体能力が上がったとは言え、まだ大地の方が力は上・・・なら！）疾風っ！！」

「後ろ！？」

「ふっ！！」

「がっ・・・！？」

終夜は高速で回り込み大地に一撃を加え、大地から距離を取った

「スピードで撹乱からのヒットアンドウェイ・・・厄介だな」

「やっぱり決定打にはなりえないな・・・3分過ぎたら勝ち目はない・・・」

「やっぱスーパーモードをさらに超えるしかないか・・・？」

「秘術・封・・・行けるか？」

次回に続く！

え！？続くの！？

第17話　再対決!!大地対終夜!!（後書き）

いやー終わった終わった。
え?前回のなのは対フェイトの続き?
原作どうりですよ?
・・・書くのがめんどかったわけじゃないからな!?

大「うう・・・貧血が・・・」

終「アリサの裸エプロン。（ぼそっ）」

大「ぐぼぉ!?や、やめろ!?それ以上は本格的に（鼻血が）やばい!!」

終「セーラー服でポニテ。」

大「愚はぁ!?」

どさっ

ほんと、変態め。

あ、このくだりになる原因は活動報告にあります。

番外編　バカとテストとＧＨＱ（前書き）

勢いでやった

後悔もしてるし。反省もしている。

だが、満足だ。

番外編　バカとテストとＧＨＱ

この物語は、大地たちが“もし”「バカとテストと召喚獣」の世界にいたら。
というお話である。

ここは文月学園のとある教室…
その教室の扉が開き少年と少女…ではなく2人の少年が入ってきた

「よお吉井（バカ）に秀吉、遅いな！」

2人に少々ひどい挨拶をしたこの少年は高町大地。
3年の高町なのはの弟にあたる。

「…ねえ、大地？何も直接言わなくてもいいんじゃないかな？」
「事実だろ？」
「ちがうよ！ほら、能ある蛙は尻を隠すって言うだろ！！」
「素晴らしい勘違いだな。能ある鷹は爪を隠してるんだな。」
「そう！それだよ！！そのとうり！今のはわざとさ！！」
「明久…それは自分がバカだと言ってるようなもんじゃぞ…」

このバカ丸出しの少年は吉井明久、大地の悪友、というかバカ友達だ。
その隣りにいるのは一見すると美少女にしか見えない木下秀吉（♂）。
そしてここは…

…常識外れのバカの巣窟、Ｆクラスだ。

「おら！！そこの蛆虫ども！さっさと席につけ！！」
「？坂本（ゴリラ）いつの間にそこにいたんだ？」
「大地？今のは喧嘩を売ったんだよな？それでいいんだよな！！」

この教壇に立っているのは坂本雄二。悪鬼羅刹と言われた男だ。

「落ち着けよ。バナナやるから。（どやぁ）」
「ふっざけんな！！なんだそのドヤ顔！！」
「オー怖い怖い。」
「ところで、何でそんなとこに立ってるの？」

坂本はいったん大地とのやり取りを止め、明久の疑問に答えた

「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた。何せ俺がここの最高成績保持者……つまり、代表なんでな」
「こんなのが（ゴリラ）が代表ねぇ…」
「ンだとコラァ！？」

因みにこの三人、学校の問題児とされている。
しかも仲がいいからさらに達が悪い。

…とまぁ、いろいろとあったわけだが基本原作と同じだし割愛ってことで～ｂｙ作者
時間が飛んで自己紹介！！

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」
（相変わらずの美少女具合…今度はどんなコスプレをしてもらうかな…？）
大地が不純なことを考えているが、それも仕方がないほどの美少女なのだから仕方ない。
……一応男だが。
「…土屋康太」
次にムッツリーニ、ムッツリ商会のトップ。
この学園の風紀委員会とも傭兵集団とも言われている組織、ＧＨＱの敵ＦＦＦ団の協力者でもある。
「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」
一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。
「吉井明久を殴る事です」
当人は先ほど時間飛ばしの間に受けた４の字固めのダメージが再発したのか、膝を抑えガタガタ震えていた。
そのあとは、ただ単に名前を告げるだけの作業が進んでいった。
そしてしばらくすると明久の番になった
「え～っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださ

いね♪」
『ダァアーーリィーン！！』
男らしい野太い声の大合唱が、Ｆクラスの教室に響き渡った。
当然明久はめちゃくちゃ笑顔をひきつらせた。
「…失礼。忘れてください。」
「ヴァカメ！」
「…エクスカリバー？」
「あの、遅れて、すいま、せん……」
「えっ？」
そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。
その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声が上がる。
「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」
「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」
途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。
「はいっ、質問です！」
「あ、はいっ。なんですか？」
「何でここにいるんですか？」
傍から見れば失礼な質問ではあったが、ほぼ全員（明久を除く）がそう思っていた事だった。

彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主。
当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。
その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」
「ああ、化学だろ？　あれは難しかったな」

瑞希の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」
「黙れ1人っ子」
「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」
「今年一番の大嘘をありがとう」
「HA☆HA☆HA甘いな！貴様ら！！」
『誰だ！！』

急にクラスに響く声にクラスの全員（坂本、秀吉、姫路、担任を除く）が反応した

「いいだろう…貴様ら愚民に教えてやろう…とぉう！！」

すたっ

ばきぃ

ごしゃっ

「痛っ！！」

クラスのどこからか飛び出したそいつは空中で１０回ほど前転し教卓の上に着地。

…までは良かったが。

着地した瞬間、教卓は崩れ落ち、そいつは地面に倒れた。

『うわぁ…』

「くっ…予想外だった…」

そいつはなりをただすと二度咳ばらいをした

「俺の名は高町大地！！俺は俺の信じた道を進む！！自分を信じて進む者たちよ！この設備に不満はあるか！！」

『大有だぁぁぁ！！』

「よし！貴様らの気持ちしかと受け止めた！この俺がお前らをこの学校の底辺から助けてやろう！この俺についてこい！！希望の光を見せてやる！！」

『うおぉぉぉぉ！！』

「俺のことはアニキとでも呼ぶといい！！」

『アァァァニキィィィィ！！』

「なんか…俺のときとは大違いだな…」
「相変わらずじゃな…大地は。」
「なんか…すごいですね…このクラス。」

「貴様ら！ペンを執れ！！試験召喚獣戦争だぁぁ！！」
『おおぉぉぉ！！！！！』

Fクラスがバカの下、一つになった瞬間だった。

「一応クラス代表は俺なんだが・・・」

哀れ坂本

閑話休題バカテスト。

問題
以下の意味を持つことわざを答えなさい
（1）得意な事でも失敗してしまう事
（2）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え
（1）弘法も筆の誤り
（2）泣きっ面に蜂

影乃終夜の答え
（1）河童の川流れ

（２）弱り目に祟り目

教師のコメント
正解です。他にも（１）なら“猿も木から落ちる”、（２）なら“踏んだり蹴ったり”などがありますね。

吉井明久の答え
（２）泣きっ面蹴ったり

教師のコメント
君は鬼ですか

土屋康太の答え
（１）弘法の川流れ

教師のコメント
シュールな光景ですね

高町大地の答え
（１）ＡＢＡ↓ＢＡＢ←←ＡＢ↑ＢＢＡＢＡ→ＣＡ↓↑ＡＢＡＢ
（２）泣きっ面に滅びのバーストストリーム！！！

教師のコメント
コマンド入力はいりません。

「さて、お前ら、試験召喚獣戦争をするにあたって心配事があるか？」
『ありません！！』
「ならば！…坂本。作戦などは任せた。」
「いきなり交代かよ！」

大地が後ろに下がり交代で坂本がクラスの前に立った

「一応このクラスの主戦力を説明しとこう。」

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」
「……！！（ブンブン）」
「は、はわっ！」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める少年。
顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがあの有名なムッツリーニだ」
「……！！（ブンブン）

ムッツリーニと言う名に、クラスがざわめいた。
その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎。
……とされていた人物が、今目の前にいる。

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」
「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」
ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。
「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」
「えっ？　わっ、私ですかっ！？」
「ああ、主戦力だ。期待している」
その容姿と共に知られている彼女の成績を考えれば、もっともな話である。
「そうだ、俺達には姫路さんが居るんだった！」
「彼女なら、Ａクラスにも引けを取らない」
「ああ。彼女が居れば何もいらない」
「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす。」
次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。
そして自身もまた、代表として名乗りを上げた。
「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」
「それじゃあ、実力はＡクラスレベルが2人も居るってことかよ？
もしかしたら、やれるんじゃないか？」
「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」
士気は確実に上がっていき、ほぼ全員やる気が出始めて来た。
そこへ雄二の一言

「それに吉井明久がいる。」

一瞬、クラスに沈黙が訪れた

「だれそれ？」

「ちょっと雄二！　どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？」

「明久を知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ」

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かのその発言は、明久の心に深く突き刺さった。

「ちっ違うよっ！　ちょっとお茶目な１６歳につけられる愛称で……」

「そのとうり、バカの代名詞だが、うまく使えばいい捨て駒だ。」

「ひどくない！？」

それまで口を開かなかった大地がようやく口を開いた

「それに俺はＧＨＱのメンバーだ。」

ざわっ

「Ｇ…ＧＨＱ！！あの伝説の傭兵集団！？アニキはそのメンバーだったのか！！」

「すげぇや！これならぜってー勝てる！！」

「ＧＨＱに増援を要請すればＢぐらいまでなら行けるだろ。」

説明コーナー
ＧＨＱとは！

ＧＨＱとは学園が決めた唯一他の試験召喚獣戦争に傭兵または、不正（風紀を乱すこと）を行った者の粛清として干渉できる組織である。
彼らは召喚獣の実験を受ける代わりに総合科目のみだが、フィールドを展開できる。
部長と副部長の正体は謎に包まれている。
どちらもリアルの喧嘩が強く、部長は忍者のような戦い方。副部長はパワー押しらしい。
部長に粛清された者もそれなりにいる。（ムッツリー二君とか）
見た目は真っ黒な装束で顔はわからなかったが、とても長い金髪らしい。
噂では部長はテニ部との兼部とか…。

「…帰宅部ごときに何ができる」
「うるさいぞムッツリ助。お前、一回部長に負けたことあるだろうに。」
「…次は…勝つ」
「いい度胸だな？部長の代わりに俺が粛清してやろうか？」
「望むところ…！」

ムッツリー二と大地の間に一触即発なかんじの空気が流れる。

「いいだろう。ＧＨＱふくｂ…もがっ！？」
「何をしてるんだ大地？」
「…？」

しかし、それは教室に入ってきたある異分子によって防がれた。
ついでに大地の口もふさがれた。

「ふ…ふうが!?（しゅ…終夜!?）」
「大地、ＧＨＱの規則で個人単体での粛清は禁止されてるはずだが？」
「ふんがせん。（すんません。）」

突然の来客にクラスのメンバーがざわめき始める。

「おい…あれって学年首席の影乃じゃねぇの!?」
「確かに大地と仲がいいって話は聞いたことはあるけど…」
「つーかもしかして影乃もＧＨＱなのか!?」

これに重ねてさらなる来客が来ていた

「まったく…アンタはいつも喧嘩ばっかりして…尻拭いするこっちの身になってよね…？」
「アリサぁ!?」

『アリサ・バニングスだとぉぉ!!』
「才色兼備!金髪美乳!ツンデレ!この三拍子がそろった完璧美少女!!」
「なんでこんな所に!?」
「まさか俺への告白!!」
「んなわけないでしょ。思いあがるのもいい加減にしなさい。」

クラスが一瞬騒がしくなったがアリサの一声であっという間に静まった。

「に、してもなんでここに？お前らＡクラスだろ？」
「今日はホームルームだけだろ？だから一緒に帰ろうかと思ったのさ。」
「あんた一人で帰るのなんて見てられないから仕方なく私も来たのよ。感謝しなさい。」
「言い出したのはアリサだけどな。」
「ちょ！？言わない約束でしょ！！」
「心配してくれたのか？ありがとな。」

ナデナデ

「いきなり撫でないでよ！」
「いいだろ？これが初めてなわけでもあるまいし。」
「…し、仕方ないわね。少しの間撫でてもいいわよ。／／／／／」
「了解しました。お嬢様？」

『異端者を始末しろぉぉぉぉぉぉぉ！！』

大地とアリサのイチャつきに嫉妬した覆面集団ＦＦＦ団が文字通り沸いて出てきた

「お前ら！？このアニキにたてつくのかよ！？」
「それとこれとは話は別だ！！」
「なに！？」
「ずいぶんと身勝手な集団だな…」

終夜はポケットから携帯を取り出した。
ＰＩ　ＰＩ　ＰＩ
プルルル…

ガチャッ

『はい、こちらＧＨＱ。』

「終夜だ、これよりＦＦＦとの交戦を開始する。西村先生を呼んでおいてくれ。」

『了解しました。戦闘の許可を取った上で、増援を送ります。』

「いや、増援はいらない。」

ＰＩ

「大地、戦闘許可が下りた。ついでに武器の使用許可も下ろそう。」

「マジ!?久方ぶりに暴れられるぜ!」

『異端者に死を!!』

ＦＦＦ団がカッターを構え、大地は槍を床下（!?）から取り出し、終夜はクナイを懐から取り出した。

「掛かれぇぇぇ!!」

『だぁぁぁぁ!!』

「ＨＡ!!返り討ちだぜ!!」

「この後フェイトとデートがあるんだ。悪いけどさっさと終わらせるぞ。」

〔アタックファンクション：グングニル!!〕

〔忍奥義　絶!!〕

『ぎゃぁぁぁぁぁ!!』

～１０秒後～

「弱いな！俺を倒すならこの３０００倍は持って来い！！」
「あ、西村先生。こいつらの補修、お願いしますね？」
「…お前ら、いったい何したんだ？」

そこにはＦＦＦ団だった男たちの死体が積まれていた

「あ、そうだアリサ。これ」
「…映画のチケット？」
「そ、この前買ったんだが、この後一緒に見に行かないか？」
「そそそ、それって！！／／／」
「ん？まぁ、はたから見ればデートかもな。んで？行くのか？」
「…あ、あんたがどうしてもっていうならいいわよ！」
「どうしても。だ。」
「し…仕方ないわね。一緒に行ってあげる。勘違いしないでよ！あんたに誘われたから仕方なく行くのよ！！」

「なんか…すごくイチャついとるんじゃが、わしらのこと忘れとるんじゃろうか…？」
「私もいつか明久君と…」
「？姫路さん、何か言った？」
「ひゃひゃい！？なんでひょう！？」
「なんじゃ、口の中に甘い何かが広がっておｒ…うぷっ」
「どうしたひでよｓ…うぷっ」

これが俺達の日常。
騒がしいけど楽しい毎日だ。
ずっとこんな日々が続けばいいのにな。

でも番外編だから続かない！！…ＢＹ作者

番外編　バカとテストとＧＨＱ（後書き）

大「こんなんいいから本編進めろ！！」

すんません！！ほんと！気が付いたら書いてただけで！！

終「全く、ほんとに…殺されたい？」

え？あ、ちょ…なんでＢＳＭモード！？

大地君もスーパーモード！？

終「シャドウ・レイ！！」

大「かめはめ波！！」

ぐぎゃぁぁぁぁぁ！！

第１８話　実は地味キャラが最強だったりする。（前書き）

名（迷）言コーナー

『Ｘ（キサナドゥ）ごときが…、この私に一瞬でも恐怖を与えるとはな。

ほめてつかわす！！』…ザキラ（デュエルマスターズ）

大「作者…この俺に一瞬でも敗北の恐怖を与えたこと、ほめてつかわす。」

作「ゑ？」

大「ＤＥＴＨドラゲリオン召っっ喚！！」

作「え？まじで？」

グぎゃぁぁぁぁぁぁぁッぁぁアぁぁぁぁッぁぁぁぁぁぁ！！！！！

作「しかも実体化！？」

大「くたばれ！！」

作「Ｎｏぉぉぉぉぉ！！」

第１８話　実は地味キャラが最強だったりする。

終夜は距離を取った後、大地にクナイを投げた
だがそれは明後日の方向に飛んでいった

「・・・？どこを狙ってんだ？俺はここだぞ？」

「いいや・・・これで正解だ！」

『シャドウバインド』

「しまった！？」

終夜はニヤリと笑った

「準備は出来た。」

パチンと指を鳴らすと大地を取り囲むように文字が浮かび上がった。
そして、全ての文字の中心にはクナイが刺さっていた

「まさか・・・クナイは！？」

「御名答。今までのクナイはこの術式を作る為のもの。まぁ、成功したのはお前が単純な攻撃が多かったからだけど。」

「（くそ・・・このバインドかてぇ・・・）」

「シャドウバインドは特殊でね、そう簡単には外せないよ。」

終夜は最後のクナイを術式に突き刺した

〔奥義・・・封!!〕

同時に術式から黒い光の柱が立ち上がり、大地を襲った

「ぐっ・・・わ、割にあんま強くない技だな?こんなもん余裕で耐えてやるぜ!」

「ま、即席の儀式用クナイじゃそんなとこだろ。でも、封の真骨頂は・・・」

終夜は掌を地面に乗せた

「ここからさ!」

〔奥義・・・大封!!〕

封の術式に加えて新たな術式が地面に広がった

「!?」

「まだまだ!」

〔奥義・・・神封!!〕

更にその周りに術式が展開された

「そして!」

〔我流・闇棺！〕

漆黒の結界が大地を包んだ

「結界！？」

「最後！」

〔我流・分身乱舞！！〕

「行け。俺の影！」

終夜の作り出した影分身が結界の中を縦横無尽に駆け回り大地に攻撃を仕掛けた

「がっ！・・・畜生・・・こんなもんぶっ壊して・・・」

「無駄だ。４重結界術ー神封・闇棺はそう簡単には破れない。お前の気を解放してもせいぜいちょっと形が歪むだけ。」

（あいつの言葉ははったりじゃない・・・だったら！！）

「この技、本当なら儀式用クナイでやるんだけど。意外に魔力を込めたクナイで代用出来るんだな・・・」

終夜が自分の技に終夜が感心しているとシャドウが話しかけてきた

『旦那・・・ちょっとやり過ぎじゃね？』

「大丈夫。これ位しないと大地は倒れない。」

終夜は舞うように攻撃している自分の影を見ながら詠唱を始めた

『もう次の準備・・・？心配性だねぇ旦那も・・・』

（・・・ちょっと結界に魔力素使いすぎたか・・・魔力散らしておかないと。）

『ま、何にせよ。これで旦那対大地の旦那2回戦は旦那のか・・・・・・ち？』

ズドォォ！

尋常ではない量の気が大気を震わす

「！？結界内から壊す気か！！」

其処にあるのは

ピシピシ・・・

『罅が・・・』

ただ圧倒的なまでの

パリィン

「・・・スーパーモード2。」

・・・・・力のみ。

（っ！？あれが大地なのか・・・？確かにあいつは大概規格外だけど・・・）

終夜は目の前の黄金に光る男をみて、冷や汗をかいた

（こんなには無かったぞ！！）

「悪い終夜。」

「？」

「この姿はどうやら気が高ぶって好戦的になるみたいだ。つーわけで、全力で防御してくれ。加減出来そうにない。」

「おいおい・・・スーパーサイヤ人まんまじゃないか・・・」

「防御しろよ？友達殴り殺すなんて嫌だからな？」

「大袈裟なっ・・・！！」

１０ｍ以上あった筈の距離は一瞬で零となり、終夜に拳が叩き込まれた

ストレート
蹴り上げ
裏拳
蹴り
蹴り
蹴り
ボディブロー
気合包

最早それは闘いではなく一方的な暴力となっていた

（ぐっ・・・）

終夜を蹴り飛ばし

高速で回り込んで

蹴りで宙に打ち上げる

気を地面に放出し、飛行

回り込んで、叩きつけ

更に回り込んで、また打ち上げる

そして、だめ押し

「・・・超かめはめ波。」

打ち上げられた終夜に青い光の奔流が迫る

「っ！！」

終夜はとっさに地面にワイヤーを食い込ませ巻き取り、上手く回避した

「結界が割れるってぇぇぇぇ！！」

余りの攻撃に、結界が壊れて・・・

「どぉぉっせぇぇい！！」

無かった

どうやら耐えたらしい

ナイスファイトだユーノ！（ｂ＾ー。）

「ハァッ・・・ハァッ・・・」

「・・・」

（つ・・・強過ぎる・・・）

『Ｊシステム終了』

「！」

（・・・積んだな俺の負け・・・「あーミスった」は？）

ドサッ

「へ？大地？」

『一体なんなんだ！』

「すぴー・・・」

「・・・寝てる」

ズルッ（ユーノとシャドウがコケる音）

大地はもとに戻り地面に突っ伏して寝ていた

『これって・・・旦那の勝ち・・・だよな？』

「・・・多分。」

「大地、散々暴れて・・・」

「ユーノ？」

ユーノはふるふると震え始めた

「僕は結界維持（地球を壊す威力を止めた）とか衝撃波の防御（気弾の流れ弾込み）とかで大変だったんだぞ！！」

『よく耐えきったな・・・』

「もしかしてユーノが防御最強・・・？」

終夜は小さな体で大地を一生懸命叩いている、大きな力をもつフェレットを見ていた

ドゴォォォン！

「今度はなんだ！」

その爆発音はフェイトとなのはが戦闘しているほうから聞こえてきた

「まさか・・・大地の気に当てられてジュエルシードが暴力したのか！？ったく次から次へと・・・シャドウ！！ウイング展開！」

『了解！』

終夜の背中に黒い羽が現れた

「急ぐぞ！」

終夜は羽を羽ばたかせ、高速でフェイトのもとに向かった

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅフェイト

封印したジュエルシードを巡って白い女の子と戦っていたら、急に凄い衝撃波が来て、それに反応してジュエルシードが暴走したんだ

「くっ・・・」

私はジュエルシードをとめる為に近づいた

「フェイト！」

「なのは！離れろ！」

近くにいたアルフが止めるけど、いまは・・・

私はジュエルシードを両手で掴んで、魔力をあてる

「止まって・・・！！」

余りの魔力量に腕が切れていく。

「くぅぅぅ・・・！！」

でも、それはあまり長くは続かなかった

「・・・無茶はすんな。お前が傷つくのなんて俺は見たくないんだ。」

「終夜・・・？」

あの、不思議な男の子が私の抱いてジュエルシードから離れた

「こういう危険な仕事は男がやるもんだ」

そう言うと終夜はジュエルシードのほうへ飛んで行った

「待って！」

終夜は此方に背を向けたままで立ち止まった

「大丈夫。ジュエルシードはわた「違う！」・・・」

「なんで・・・なんで私を助けるの！！」

「・・・さぁて。何でだろうな？自分でもわからない。ただ・・・」

「ただ？」

「君みたいに綺麗な女の子の綺麗な笑顔を見てみたい。ってのはあるかな？」

終夜は振り返った

「もっと笑いなよ。君は、笑顔の方がもっと可愛い。」

凄く綺麗な笑顔で笑っていた

「私が、か・・・可愛い／／」

「君が何を心に抱えているのかわからないけど、それが原因で笑えないなら、俺がそれを無くす。無くせないなら、せめて、一緒に担いであげる。だから、心配しなくていい。」

私の頭に人の掌の暖かみがあった

「俺は君の味方だよ」

その暖かみも笑顔も言葉も私の心に安らぎを与えてくれた
終夜は少し私の頭を撫でるとジュエルシードに向かった
・・・終夜の手が離れたとき少し寂しく思ったのは内緒だ。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ三人称

終夜はジュエルシードの前に佇んでいた

「・・・」

戸惑いも無くそれをつかむ
手が千切れるような痛みが走る
魔力がジュエルシードに吸われる用な感覚
油断すれば意識が飛んでしまう
満身創痍。
先ほどのダメージがまだ残っている
だが、それを離す訳には行かない
自らの力でそれの持つ魔力をコントロールする

それに意識を集中させる
そして、その時
それを掴む手から今までの魔力よりより黒く、呑み込まれるような
漆黒をした魔力が出た
漆黒はそれを包み込み、侵食し、自らと同じ色に染め上げた
ちからの暴走は止まり、終夜は落ち始めた
だが、地面にぶつかることは無く
金髪の少女によって助けられた
「・・・ありがとう」
「・・・どういたしまして。こっちこそ、助けてくれてありがとな・・・」
そして、意識を手放した

終夜の手の中には黒い宝石が握られていた

第１８話　実は地味キャラが最強だったりする。（後書き）

わーテスト前日に何やってんだ俺～

大「仕方ないさ。書いちまったんだから。」

だよね？

にしても、ユーノの防御力がバグキャラ並みに…

大「…特訓の相手に選んでたからな…」

さてと、これでやっと話が多少進む。

大「管理局との接触ももうすぐだな。」

そこでは大地が重要だから、がんばれよ？

大「ったり前だ！！この俺を誰だともって居やがる！！」

んじゃあこのへんで

「「またな！！」」

先倒しアンケート（注！：下手なイラストあり）

A，s編終了後に登場するオリキャラの名前について意見を募集します！

それは…こいつです。

＞i37287―3732＜

設定

二つ名…常識の破壊者（ルール・ブレイカー）

魔力量…B級～EX（感情により変化）

気…C級（使用不可能）

魔力変換素質…轟爆（必要に応じて爆発する）

希少能力…龍ヲ友トシ呼起ス才（異世界、現実世界、並行世界問わず龍を呼び出し、友とする）

二代目（はじけ）破地華組、組長。

竜の一族最後の生き残り。

体に龍の遺伝子を宿していて、それを活性化させると風貌が龍人に変化し戦闘力が増加する。

おおざっぱな性格で、アニキオーラがハンパなく、多くの人に好か

れる。
仲間が傷つくのは大嫌い。
竜の一族は成長が早く、５歳にして１２歳の大地たち程の姿になっている。
戦闘は龍之爪（鍵爪つきの籠手）主体の肉弾戦を得意としている。
また、デバイスのモードセカンドである大剣は３段階にサイズが変わる。
基本は肉弾戦で戦うが、最も得意な武器は自分の身の丈より大きい大剣。
竜の一族は異常なまでの筋力を持っていて、傷の治癒速度も異常。
死にかける度に強くなる。
龍王拳闘の使い手
例・龍王昇波紅撃
なお、常識の破壊者（ルールブレイカー）の異名はたった一人で時空管理局の時空艦を落としたことがあるから（笑）

相棒（パートナー）
名前未定
見た目…東洋の龍をデフォルメし、小さくした感じ。体毛は真っ白。
（♀）

モード１…龍之爪
モード２…大剣（１．２～１５０ｍ、魔力刃込みだと１８０ｋｍ）

しっかりもので、ビィトの事を何時も心配している。
ビィトの肩に頭を乗せ、腕に巻き付くのがお気に入り。
デバイスと言うよりは、武器に変身出来る動物。
生き物として生きているので、武器として扱われるのを嫌う。
竜の一族は生まれてすぐ自分の武器であり、パートナーとなる竜を

探す。
元々、神の使いのような扱いだったが、ビィトに適応、パートナーとなった。

以上です。

因みに、キャラのセリフは

「おいおい！俺を忘れてんじゃねーよ！？」とか、「お前ら！ハジケよーぜ！！」とか、「お前は…少し…やりすぎた…後悔しろよ…くそ野郎…！」とか、「コーラが…足りない…ガクッ」ですね。
ちょっとギャグ要因です。

龍のほうは「ちょっと！落ち着いて！！」とか、「全く、しょうがないわね…」とか、「行くよ！『オリキャラの名前』！！」です。

締め切りは来年の3月上旬までを予定しています。
協力お願いします！！

因みに本編と特別編は現在急ピッチで執筆中です。
特別編は今までにない長さなので、もしかしたら前半だけ今日更新するかもしれません。
それでは！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6545v/

リリカルなのは～中２病な（元）中２の異世界転生記～

2011年12月17日11時45分発行